

# 永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2018年 1月

「恐れるな、小さい群れよ」「反逆の愚かさ(II)」「メッセージ」「セリと大根のサラダ」

# 永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

## 目次

今月の聖書勉強

「反逆の愚かさ (II)」

4

聖書の教え

朝のマナ

「この日を神と共に」

7

This Day with God

現代の真理

「永遠の福音」

39

清めの特別な働き

力を得るための食事

セリと大根のサラダ

42

お話コーナー

「安息日遵守 (IV)」

46

イエスの物語

教会

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

電話：0494-22-0465

FAX：0494-40-1045

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2

電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21

電話：0980-55-8136

アクセス [www.4angels.jp](http://www.4angels.jp)

メール [support@4angels.jp](mailto:support@4angels.jp)

発行日 2017年12月31日

編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: istock on Front page, Joe Maniscalco on pages 6, 46

Printed in Japan

## 喜んでそうするものになりたいと望むなら

「従順な子供として、……『わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者になるべきである』」（ペテロ第一 1:14-16）。

「『わたしの愛する者たちよ。そういうわけだから、あなたがたがいつも従順であったように、わたしが一緒にいる時だけでなく、いない今は、いつそう従順でいて、恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい。あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。……』（ピリピ 2:12-16）。

これらの言葉は、努力しているすべての魂に役立つようにと記された。パウロは理想の標準をかかげて、それに到達する方法を教えている。「自分の救の達成に努めなさい。あなたがたのうちに働きかけ……るのは神で」 であると彼は言っている。

救いを得る仕事は協同組合のようなもの、すなわち、共同作業である。神と悔い改めた罪人との間に協力がなければならぬ。これは品性における正しい原則を形成するのに不可欠である。人は完全を目指すにあたって、妨げとなることを克服するよう、ひたすら努力しなければならない。しかし、これを成功させるために全く神により頼むのである。

……

神はわれわれが自己にうち勝つことをお望みになっている。しかし、神は、われわれの同意と協力がなければ、われわれを助けて下さることができない。聖霊は人に与えられた力と能力を用いて働かれる。われわれは自分では、目的と願望と性向とを神のみ旨に一致させることができない。しかし、もしわれわれが喜んでそうするものになりたいと望むなら、救い主はわれわれのためにこれをなし遂げ、「神の知恵に逆らって立てられたあらゆる障害物を打ちこわし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ」て下さる（コリント第二 10:5）。

健全で均齊のとれた品性を築きたいと思う者、よく釣り合いのとれたクリスチャンになりたいと思う者は、すべてをささげ、キリストのために全力をつきなければならない。なぜなら、あがない主は、分割された奉仕はお受け入れにならないからである。日毎に従順の意味を学ばなければならない。神のみことばを研究し、その意味を学び、その教えに従わなければならない。こうして、クリスチャンとしての卓越した標準に到達できるのである。神は毎日共に働いて下さり、最後の試みの時に耐えられるような品性を完成させて下さる。」（患難から栄光へ下巻 175-177）

## 第2課 反逆の愚かさ(Ⅱ)

### 悪のわざは地上で続けられた

サタンと三分の一の天使たちは天から追放された後、彼は罪のない世界を治めていた最初の男女を誘惑しにきました。

「地と海よ、おまえたちはわざわいである。悪魔が、自分の時が短いのを知り、激しい怒りをもって、おまえたちのところに下ってきたからである」(黙示録12:12)。

聖書は詳細を短く述べているにすぎませんが、サタンが女を欺くための媒介としてへびを用いたと理解するのが筋です。今度は女が男を欺くための媒介として用いられました。

「さて主なる神が造られた野の生き物のうちで、へびが最も狡猾であった。へびは女に言った、『園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか』。女はへびに言った、『わたしたちは園の木の実を食べることは許されていますが、ただ園の中央にある木の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神は言われました』。へびは女に言った、『あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。』」(創世記3:1-4)。

エバは自分の夫から離れて、誘惑者に耳を傾けたときに、初めの過ちを犯しました。そのとき、彼女はアダムに自分自身が食べた実を差し出すことにより、サタンの代理人となりました。罪に陥ったため、彼らは悪魔の策略に抵抗するには無力でした。彼らの神の戒めに対する不従順を通して、悪がこの世界に入ってきました。人類は今や自分たちの選んだ支配者の支配下にいるのでした!サタンとその墮落天使たちは、継続して人類を誘惑し、神のみわざに敵対しています。わたしたちは自分の周囲の至る所に恐ろしい結果を見ることができます。

「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている」(ペテロ第一5:8)。

「悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武器で身を固めなさい。わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの

世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである」(エペソ 6:11,12)。

人々はサタン計画についてまったく無知かもしれませんが、この強力な敵は絶えず彼らの後をつけねらっています。彼はすべての家族に、わたしたちの諸都市のあらゆる部分に、わたしたちの教会に、国会議事堂に、裁判所に入り込み、欺き、墮落させ、至る所で大人や子供の魂と体を破滅させ、家族を破壊し、憎しみ、ねたみ、殺人を撒いています。そしてクリスチャンたちがこれらのことをあたかも神によって存在するものとして定められたことだとみなしているかのようなのです。

### なぜ罪の入ることが許されたか？

サタンは自分自身のとった行動が天で引き起こした不調和を神の統治のせいになりました。彼はあらゆる悪が神聖な政権の結果であると宣言しました。神の律法に改良を加えるのが自分の目的だと彼は主張しました。ですから、神は、彼がその主張の性質を明らかにし、聖なる律法に彼の提案する変更を加える結果を示すことを許されました。彼自身のわざが彼を有罪に定めることが許されたのでした。サタンは初めから自分は反逆しているのではないと主張したため、全宇宙は欺瞞者の仮面がはがされることを見なければなりませんでした。

サタンが天から追放されたときでさえ、神は、その無限の知恵のうちに、彼を滅ぼされませんでした。宇宙の住民たちは、罪の性質や結果を理解する準備ができていなかったため、その時にサタンが滅ぼされたら、神の正義を認めることはできないのでした。直ちに彼が抹殺されたなら、ある者は愛からよりもむしろ恐怖から神に仕えたことでしょう。全宇宙の永遠にわたる益のために、彼は自分の諸原則を十分に発達させなければなりませんでした。こうして、神の統治に対する彼の告発を、すべての被造物が真の光のうちに認めることができるためでした。神の正義と憐れみ、そしてこのお方の律法の不変性が、永遠に一切の疑いの余地なく据えられなければなりません。

「……全能者にして主なる神よ。あなたのみわざは、大いなる、また驚くべきものであります。万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります。主よ、あなたをおそれず、御名をほめたたえない者が、ありましようか。あなただけが聖なるかたであり、あらゆる国民はきて、あなたを伏し拝むでしょう。あなたの正しいさばきが、あらわれるに至ったからであります」(黙示録 15:3, 4)。

## 悪の終結

罪およびあらゆる悪の終わりはもうすぐです。それは最も効果的な方法で破壊され、二度とその醜い頭をもたげることはありません。罪の根であるサタン、そして枝である彼の従者は、永遠に滅ぼされます。

「万軍の主は言われる、見よ、炉のように燃える日が来る。その時すべて高ぶる者と、悪を行う者とは、わらのようになる。その来る日は、彼らを焼き尽して、根も枝も残さない」(マラキ 4:1)。

「それから、左にいる人々にも言うであろう、『のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使たちとのために用意されている永遠の火にはいってしまえ。』」(マタイ 25:41)。

罪は決して二度と起こりませんし、罪の結果である死もなくなるのです。

「あなたがたは主に対して何を計るか。彼はその敵に二度としかえしをする必要がないように敵を全く滅ぼされる(完全な終わりをもたらし、苦痛は二度と生じることはない)」(ナホム 1:9)。

地はその本来の輝きに回復され、そこには罪も死も入ることができません。そこに、救われた者の国々は自分の永遠のふるさとを見出すのです。

「しかし、わたしたちは、神の約束に従って、義の住む新しい天と新しい地とを待ち望んでいる」(ペテロ第二 3:13)。

「『人の目から涙を全くぬぐいにとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のが、すでに過ぎ去ったからである』。すると、御座にいますかたが言われた、『見よ、わたしはすべてのものを新たにする』。また言われた、『書きしるせ。これらの言葉は、信ずべきであり、まことである。』」(黙示録 21:4, 5)。

約束の地の栄光は、わたしたちの想像が描くことのできる最も素晴らしい光景をはるかにまさったものとなるでしょう。

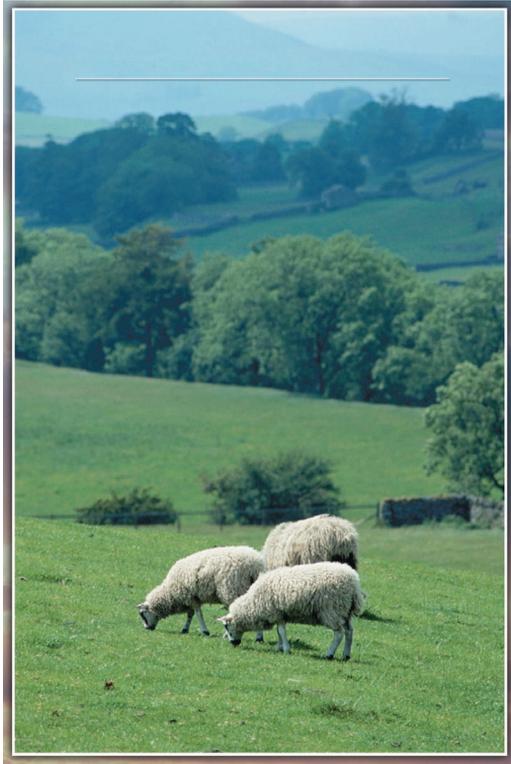
「しかし、聖書に書いてあるとおり、『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかつたことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた』のである」(コリント第一 2:9)。

神のみ言葉はいつも真実です。このお方のみ約束は決して裏切ることがありません。

親愛なる友人の皆さん、皆さんは新地で生活するでしょうか。

## 恐れるな、小さい群れよ

*Fear Not, Little Flock*



「世界の人口に比べれば、神の民は、常にそうであったように、ごく小さな群れであろう。しかし彼らが、みことばに示されている真理に立つならば、神は彼らの逃れの場となって下さる。彼らは全能の神の広い盾のもとに立つのである。」(患難から栄光へ下巻 296)

01月

1月1日

## イエス・キリストとはだれか

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。……そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。」(ヨハネ 1:1-3, 14)

言は神聖な存在として、しかも永遠の神の御子として、その御父と一致し、また一つであるお方として存在しておられた。永遠の昔から、このお方は契約の仲保者であられ、地上のすべての国家、すなわちユダヤ人も異邦人もこのお方を受け入れるならば、このお方のうちに祝福されるのであった。「言は神と共にあった。言は神であった」(ヨハネ 1:1)。人や天使が創造される前から、言は神と共にあり、言は神であった。

世は彼によって造られた、「できたもののうち、一つとしてこれ(彼)によらないものはなかった」(3節)。もしキリストが万物を造られたのであれば、万物の前にこのお方は存在しておられたのである。これに関して語られた言葉は非常に決定的で、だれも疑いのうちに取り残される必要はない。キリストは本質的に、また最高の意味において神であられた。このお方は永遠の昔から神と共におられ、万物の上にあります神であり、とこしえにほむべきかたであった。

主イエス・キリスト、聖なる神の御子は、永遠から存在しておられ、個別の人格を持ったお方でありながら、御父と一つであられた。このお方は卓越した天の栄光であられた。このお方は天の知的存在者たちの司令官であられ、ご自分の権利として御使たちの崇拜する敬意をお受けになった。……神がこのように肉において表されたことは実に神秘である。そして聖霊の助けがなくては、この主題を理解することは望みえないのである。(サイズ・オブ・タイムズ 1899年4月26日)

どれほど理由を挙げて説明しても、世の創造のなぞや理由を語ることはできない。それは、創造の偉大な力を信じる信仰によってのみ理解されるのである。信仰によって、わたしたちはイエス・キリストを通して働く力強い神の創造の力を信じなければならぬ。(ウォッチマン 1902年4月24日)

天の会議で任命されたお方が、地に教師として来られた。このお方は世の創造主、無限の神の御子に他ならなかった。神の豊かな慈愛がこのお方をわたしたちの世に与えて下さったのである。そして、人類の必要に応えるために、このお方は人の性質をおとりになった。天の万軍が驚嘆したことに、このお方はこの地上を永遠の言として歩まれた。……神の過度のいつくしみ深さ、慈愛、そして愛、また実感することはできるが、語ることでできない恵みは、世にとって驚きであった。(教育に関する特別な証 173, 174)

## 完全な救い主

「〔マリヤ〕は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである。」(マタイ 1:21)

キリストはご自分の高められた御座から降りてこられ、王宮を後にし、ご自分の神性に人性をまとい、そして人の子らの間で人となられた。このお方は十字架の苦悩と死にまでご自分を低くされたが、それは人が高められるため、すなわち人が神性にあずかる者となり、勝利者となり、そしてキリストと共に栄光のうちにこのお方のみ座に場所を得ることができるためであった。(サイズ・オブ・タイムズ 1891年6月15日)

地上のどの人も、あるいは天のどの御使も罪のための刑罰を支払うことはできないのであった。イエスだけが反逆の人類を救うことができるお方であった。(同上 1892年12月5日)

わたしたちが敵の力の支配下にあり、彼の奴隷であったときに、キリストはわたしたちのためにご自分の命を与えて下さった。わたしたちは自分自身のものではない。このお方はわたしたちを苦悩と血の代価をもって買って下さったのである。この偉大な犠牲の目的はわたしたちを神の息子むすめの自由に導き入れることであった。しかし、もしわたしたちが心のうちに悪を抱いているならば、自分の救い主のご目的を無にするのであり、神が当然受けられるべき奉仕を神から奪うことになる。イエスは人類をその罪のうちにではなく、その罪から救うために来られたのである。「罪は不法である」(ヨハネ第一 3:4)、そしてもしわたしたちが律法に従わないのであれば、自分の救い主を受け入れていないのである。わたしたちが持つ救いの唯一の望みは、キリストを通してである。もし聖霊が心のうちに宿るのであれば、罪はそこに住むことはできない。(ビュー・アンド・ヘルド 1886年3月16日)

わたしたちをご自分の民をその罪から救うために来られたお方の使命を瞑想すべきである。このように天の主題を瞑想するにつれ、わたしたちの信仰と愛はますます強く成長し、わたしたちの祈りはますます神に受け入れられるものになっていく。なぜなら、それらに信仰と愛が混じるようになるからである。それらは知的であり、熱烈である。ますますイエスへ変わらない信頼をおくようになり、このお方によって神の御許へ行くすべての人を最高にまで救うこのお方の力において日ごとに生きた経験を持つようになる。(サイズ・オブ・タイムズ 1906年4月18日)

なぜ、あなたは神が与えて下さった男らしさ、女らしさのうちに立ち、キリストを通して勝利者になろうと決心しないのであろうか。なぜ、「神は力を約束して下さった、だから、わたしは自分の創造主であり贖い主であるお方の道徳的なみかたちを取り戻す」と言わないのであろうか。思いが敵と交わることを許してはならない。彼の力を語って失望することがあってはならない。キリストについて語りなさい。このお方はご自分によって神の御許へ来るすべての人を最高にまで救うことができになる。わたしたちには完全な救い主がおられる。であるから、人の罪のために、そしてわたしの罪のために死なれたお方を信じる完全な信仰を持とう。わたしたちがこの立場をとるとき、自分の救い主に休息と平安を見いだすようになる。

1月3日

## 神われらと共にいます

「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう。これは、『神われらと共にいます』という意味である。」(マタイ 1:23)

「インマヌエル、神われらと共にいます」。これはわたしたちにとってすべてを意味する。わたしたちの信仰のために、これはなんと広い基礎を敷くことであろう!それは信じる魂の前に、不死のなんと大きな希望をおくことであろう!キリスト・イエスのうちにわれらと共におられる神が天への旅路の一步ごとに伴われるとは!慰め主として、わたしたちの困惑における案内者として、わたしたちの悲しみを和らげ、誘惑の時にかくまってくださる聖霊がわたしたちと共におられるとは!(原稿別巻3巻18)

この力強いイスラエルの神がわたしたちの神であられる。このお方にわたしたちは信頼しなければならぬ。そしてもしわたしたちがこのお方のご要求に従うならば、このお方は昔のご自分の民のためになされたように、わたしたちのために際立った方法で働いて下さるのである。……

義務の道に従おうとするすべての人は時に疑いや不信に襲われることがある。時には、失望に屈する人々を落胆させるほど、道が障害物にふさがれて、一見乗り越えられないように見えることがある。しかし、神はそのような人に言われる、前進せよ。いかなる代価を払うことになっても自分の義務を果たしなさい。あなたを脅かし、圧倒する悩みの海は、あなたが前進するときに開かれ、あなたの足のために安全な道を表す。あまりに恐ろしく見え、あなたの魂を恐怖で満たす試練や困難は、あなたがへりくだって神に信頼しつつ、大胆に従順の道を前進するときに消えるのである。

すべての魂のために日ごとの重要な義務がある。だれも免除されてはいない。現在の義務は今なされなければならない。なぜなら、時は短く、一度失われた機会は二度と戻らないからである。困難に直面した時の一瞬のためらいに危険がある。神は、柔和な者、へりくだる者、感謝に満ちた従順な者にとって、光となられる。しかし、利己的な者、誇り高い者、短気な者、またつぶやく者たちにとっては闇の雲であられる。遅かれ早かれ、光はキリストが導かれる道にいつでもどこでも行く用意をしている人々の道を照らすのである。

人生における一步一步が、信仰と愛と献身の一步であるべきである!……キリストは人生行路のすべてをわたしたちと共に歩み、ご自分のご臨在をもってわたしたちの道を元気づけようと申し出ておられる。もしわたしたちがこのお方の同伴を得ていないとしたら、それはわたしたち自身の責任であり、わたしたち自身の損失である。もしわたしたちが闇の中で手探りをするなら、それはわたしたちが自分の道を明るく喜ばしいものとする事のおできになる唯一のお方のご臨在を拒むからである。わたしたちは愛によって働き、魂を清める信仰を培う必要がある。(サイズ・オブ・タイムズ 1880年11月11日)

## 博士たちの信仰

「イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生れになったとき、見よ、東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った、『ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました。』」（マタイ 2:1, 2）

この賢者たちは、自然の探究者であり、神のみ手のわざの中に神を認めただのである。ヘブルの聖書から、彼らは、ヤコブから星が現われることを学び、「イスラエルの慰め」であるばかりでなく、「異邦人を照す啓示の光」であり、「地の果までも救をもたらす」おかたが来られるのを熱心に待望していた（ルカ 2:25,32; 使徒行伝 13:47）。彼らは光を求めていた。そして、神のみ座からの光が彼らの歩く道を照らした。真理の擁護者、また解説者として任じられたエルサレムの祭司や教師たちが、暗黒に閉ざされていたときに、天からの星はこれら異邦の旅人を、新たにお生まれになった王の誕生地へと導いたのである。（各時代の大争闘 上巻 404）

主は、宇宙の恩人、無限の愛の存在であられる。このお方の優しい憐れみが、そのすべてのみわざの上に及んでいる。このお方は真理を持っていない様々な国にいる人々の大きな欠乏をご覧になる。幾千もの人々が自分の現状に満足しておらず、より良い道を知りたいと望んでいる。彼らは光に飢え渴いており、より大きな保証、より深い霊性を切望している。思いが大いにかきたてられている。それでいながら、彼らにメッセージを携えて行く者がなんと少ないことであろう！

兄弟がたよ、わたしたちは自分自身の心のうちに神の御霊のより深い働きを必要としている。イエスは天において富んでおられた。しかし、わたしたちのためにこのお方は貧しくなられた。それはこのお方の貧しさを通して、わたしたちが富んだ者とされるためであった。キリストの生涯、その自己否定と自己犠牲は、自分の同胞を救うためにできることをなすというこの大いなる働きに携わることができるし、そうすべき者たちの怠惰と不活動を譴責する。（レビュー・アンド・ワールド 1879年 2月 6日）

キリストの働き人一人ひとりには、自分のいるところで始めなければならない。自分自身の家族の中に、同情に飢え、命のパンがなくて死にかかっている魂がいるかもしれない。キリストのために訓練すべき子供たちがいるかもしれない。まさにわたしたちの戸口に異教徒がいるかもしれない。最も近いところにある働きを忠実になそう。それから、わたしたちの努力を、神のみ手が道を導かれるがままに広げていこう。多くの人々の働きは状況に制限されているように見えるかもしれない。しかし、どこであろうと、もし信仰と勤勉さをもってなされるならば、それは地の最果てまで感じられるようになる。……神はしばしば、もっとも偉大な結果を果たすために、もっとも単純な手段をお用いになる。（同上 1913年 10月 9日）

1月5日

## 幼年時代と青年時代におけるイエス

「幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みがその上にあった。」(ルカ 2:40)

〔イエス〕は天の全能者、栄光の王であられたにもかかわらず、ベツレヘムで赤子となられ、しばしの間、母親の保護のうちにいる無力な幼児を代表された。幼年時代、このお方は従順な子供の働きをなされた。このお方は子どもの能力に従って親を尊び、助けになる方法で彼らの願いを実行しつつ、大人ではなく子供の知恵をもって語られ、行動された。……

キリストの生涯は、ごく幼少の頃より、熱心な活動の生涯であった。このお方はご自分を喜ばせるために生きられなかった。このお方は無限の神の御子であられたが、大工職でご自分の父親ヨセフと共に働かれた。このお方の職業には重要な意味があった。このお方は品性建設者としてこの世に来られたのであった。そしてそのようなお方として、み働きはみな完全であった。ご自分が神性の力によって変えておられた品性に持ち込まれた同じ完全さを、ご自分のこの世のすべての労働にも持ち込まれた。

このお方はわたしたちの模範であられる。多くの子供や青年たちによって、家庭の重荷を負い、それによって父親や母親への愛情深い関心を示すために用いることができるはずの時間が無駄にされている。青年たちは自分たちの強く若い肩に、だれかが負わなければならない多くの責任を引き受けることができる。

イエスは、多くの青年たちのように、ご自分の時間を娯楽に用いることはなさらなかった。このお方は勤勉に聖書研究に従事なされた。なぜなら、それを自分の勧告者とするすべての者にとって、それが貴重な教えに満ちていることをご存じであったからである。このお方は家庭の義務を果たすのに忠実であられた。そして早朝、寝床で無駄にする代わりに、しばしば奥まった場所で聖書を瞑想し、探り、そして祈りのうちにおられるのが見られた。ご自分の働きととりなしに関するすべての預言、特にご自分のへりくだり、贖罪、とりなしに関する預言に通じておられた。幼年時代にも青年時代にも、このお方の生涯の目的は、つねにこのお方の前にあった。……

イエスはご自分の労働に快活さと気転とを持ち込まれた。家庭生活と職場に聖書の宗教をとり入れ、世の中の仕事の重荷を負いながらなお神の栄光に対して目が澄んでいるためには非常に忍耐と靈性とが必要である。この点においてイエスは人々の助けとなられた。彼は天の事物のために時間を費したり考えたりする余裕がないほどこの世の苦労をいっぱいかかえておられなかった。……イエスは歌を通して天とまじわられた。仲間の者たちは、働きに疲れて不平を言うと、イエスの口から出る美しい歌の調べに元気づけられるのだった。(ユース・インストラクター 1909年5月25日)

## 謙遜な骨折りの尊厳

「イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された。」  
(ルカ 2:52)

わたしたちの救い主の生涯のはじめの30年は、奥まった場所で過ごされた。奉仕する御使たちは、このお方がナザレの丘の間を百姓や労働者たちと共に、認められることも尊ばれることもなく歩んでおられたとき、命の主にならなれた。(レビュー・アンド・ヘラルド 1882年11月14日)

正直な働きは天の是認を受けてきた。そして、男女は神と最も密接なつながりを持ちながら、なお人生において最も低い地位を占めることもあり得る。イエスは大工といういやしい職業をもってご自分の神性を隠しておられたときに、病人をいやしたり、恐れるご自分の弟子たちを助けるために白く泡立つ怒涛の上を歩かれたりしたときと同じように、ご自分の使命を忠実に果たしておられた。キリストは使用人の立場を占めることによって人生のつましい職業を高貴にされた。それはこのお方が人類に手を差し伸べ、彼らを神のパラダイスに入るのにふさわしい者へと高めることができるためであった。

長い間、イエスはナザレで尊ばれることなく、知られることなく住んでおられた。それはこのお方が人々に、どのように生活のいやしい義務を果たしながら、神に近く生きるかを教えるためであった。キリスト、すなわち天の大能者が、ご自身に人性を取られるだけでなく、その最も重く最も屈辱的な職務を引き受けるためにご自分を低くされるということは天使たちにとって神秘であった。このお方はわたしたちの一人と同じようになられるためにこうされたのである。それはこのお方が人の子らの骨折り、悲しみ、疲労を知るためであり、より人の苦悩に同情し、その試練を理解することができるためであった。

宗教を自分の事業と切り離す人々はイエスの模範によって非難されている。ナザレの丘の間に隠されながら、なお天に対して天使の万軍全体に命じることのできるような権利を持っておられたが、このお方はただの大工であり、賃金のために働き、あらゆる失望に直面しながら信心深い生活を送っておられた。機械工、商人、弁護士、あるいは農夫の職務につき、キリスト教の教訓を人生の通常の実践の中で実践しながら、神のために働くためには、公の伝道地で伝道者として認められ、自分の立場が知られており、かつその事実そのものにより困難の半分が未然に防げるところで働くよりもはるかに多くの恵みと品性の厳格な規律が要求される。

宗教を作業場や事務所に持ち込み、日常生活の詳細まで聖化し、すべての世俗的な取引を聖書的なクリスチャンの標準に従って整えるためには、強い霊的な神経と筋肉が要求される。(健康改革者 1876年10月1日)

1月7日

## キリストの働きのために道を備える

「そのころ、バプテスマのヨハネが現れ、ユダヤの荒野で教を宣べて言った、『悔い改めよ、天国は近づいた』。預言者イザヤによって、『荒野で呼ばれる者の声がある、主の道を備えよ、その道筋をまっすぐにせよ』と言われたのは、この人のことである。」(マタイ 3:1-3)

バプテスマのヨハネは誕生の時から聖霊に満たされた人であった。もし彼の生きていた時代の墮落した感化に影響を受けずにいることができる人がいるとすれば、それは間違いなく彼であった。しかし、彼はあえて自分自身の力に信頼しようとはしなかった。彼は自分の生来の愛情が自分にとってわなとなることのないように、自ら自分の友人や親戚から分離した。彼は不必要に自分の身を誘惑の道に置くことも、またぜいたくや、あるいは生活上の利便性でさえも、自分を安逸への放縦や食欲の満足へと導き、それによって身体的また精神的力を弱めるかもしれないような場所に身を置くこともしなかった。そのような道をたどることによって、自分が果たすために来た重要な使命が成し遂げられずに失敗するのであった。

彼は自ら荒野での欠乏と孤独の生活に服した。そこでは、自然という神の大きいなる書物を研究することによって、神の大権について聖なる感覚を維持し、それによって神のすばらしいみわざに表されたこのお方のご品性をよく知ることができたのであった。それは道徳的な修養を完成し、絶えず彼の前に主の恐れを維持するよう意図された雰囲気であった。キリストの先駆者であったヨハネは、自らを世の邪悪な会話や墮落した感化にさらさなかった。彼は罪がはなはだ罪深いものに見えなくなるのではないかと、自分の良心に及ぼすその効果を恐れた。彼はむしろ荒野に自分の家を持つことを選んだ。そこでは彼の感覚は周囲によってゆがめられることがないのであった。わたしたちはキリストが尊び、女から生まれた者の中でバプテスマのヨハネほど大きいなるものはなかったと言われた人のこの模範から教訓を学ぶべきである。(ビュー・アッド・ワルド 1882年11月14日)

ヨハネの訓練は社会の通常の習慣に従ったものであつてはならなかった。彼は当時の人々の思想に新しい方向を与え、彼らをより高尚な種類の人格の必要性に目覚めさせる器となるのであった。神はご自分のしもべの品性が神聖な型に従って形成されることを望まれた。荒野が彼の教室であった。……彼の考えがゆがめられないように、彼の生活習慣は純潔で自然なものであった。そして彼の品性は後に直面しなければならぬ悪の感化力によって曲げられることがなかった。(健康改革者 1880年2月1日)

## わたしたちの回復の働き

『確かに、エリヤがきて、万事を元どおりに改めるであろう。しかし、あなたがたに言っておく。エリヤはすでにきたのだ。しかし人々は彼を認めず、自分かつてに彼をあしらった。人の子もまた、そのように彼らから苦しみを受けることになろう』。そのとき、弟子たちは、イエスがバプテスマのヨハネのことを言われたのだと悟った。」(マタイ 17:11-13)

この時代、すなわちキリストが天の雲に乗って二度目に来られる直前に、バプテスマのヨハネの働きと同様の働きがなされなければならない。神は主の大いなる日に立つ民を備える人々を召しておられる。キリストの公生涯に先立つメッセージは「取税人と罪人たちよ、悔い改めよ、パリサイ人とサドカイ人よ、悔い改めよ 悔い改めよ、天国は近づいた」であった(マタイ 3:2)。キリストのままない来臨を信じている民として、わたしたちには担うべきメッセージがある、「あなたの神に会う備えをせよ」(アモス 4:12)。わたしたちのメッセージは、ヨハネのメッセージと同様に真つすぐなものとなるべきである。彼は諸王を彼らの悪のために譴責した。彼の命が危険にさらされても、彼は神のみ言葉を宣言することをためらわなかった。そしてこの時代におけるわたしたちの働きは同じように忠実になされなければならない。

ヨハネが伝えたようなメッセージを伝えるためには、わたしたちは彼と同じような霊的な経験を持たなければならない。わたしたちのうちに同じ働きがなされなければならない。わたしたちは神を眺め、このお方を眺めるうちに、自己を見失わなければならない。

ヨハネは生来、人間共通の欠点や弱さを持っていた。しかし、神聖な愛の接触により、彼は変えられていた。キリストの公生涯が始まった後、すべての人がこの新しい教師に従っているというつぶやきをもってヨハネの弟子たちが彼の許へ来たとき、ヨハネはメシヤに対する自分の関係をどれほどはつきり理解しているか、またどれほど〔このお方を〕歓迎し、喜んでいるかを示した。……

信仰のうちに贖い主を眺めて、ヨハネは自己放棄の高さにまで上っていた。彼は人々を自分に引きつけようとせず、彼らの思想を高く、なおも高く、神の小羊にとどまるまで引き上げた。彼自身はただの声、荒野における叫びにすぎなかった。今や彼は喜んで沈黙し、世間に忘れられることを受け入れた。それはすべての人の目が命の光に向けられるためであった。神のための使命者として自分の召しに真実である人々は、自分自身のために誉を求めようとしない。自己への愛はキリストへの愛に飲み込まれるのである。彼らは、バプテスマのヨハネのように、次のように宣布することが自分たちの働きであることを認めるようになる、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ 1:29)。(レ・ビュー・ア・ヴ・ワルド 1907年 11月 28日)

バプテスマのヨハネの働きは、わたしたちの働きである。(セントラル・アト'パンス 1903年 4月 8日)

1月9日

## わたしたちの上にさえ輝いている光

「そのころ、イエスはガリラヤのナザレから出てきて、ヨルダン川で、ヨハネからバプテスマをお受けになった。そして、水の中から上がられるとすぐ、天が裂けて、聖霊がはどのように自分に下って来るのを、ごらんになった。すると天から声があった、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。』」（マルコ 1:9-11）

イエスをご自分のバプテスマの後に祈られると、聖霊が燃える金のはどのようなかたちでこのお方の上にとどまり、次のように言う声が聞こえた「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」（マタイ 3:17）。少し開かれた門を通して、栄光の明るい光線がエホバの御座からあふれ出た。そして、この光がわたしたちの上までも照らすのである。キリストに与えられた保証は、悔い改め信じる神の従順な子ら一人びとりにとって、自分が愛されるお方のうちに受け入れられるという保証である。

わたしたちは自分たちの享受するすべての祝福をキリストに負っている。わたしたちは自分たちがこのお方のとりなしの対象であることを深く感謝すべきである。しかし、サタンはキリストの奉仕を男女の前に偽りの光のうちに提示し、彼らにイエスを自分の贖い主として受け入れることは自分を卑下することだと思わせて欺く。もしわたしたちが正しい光のうちにクリスチャンの特権を見るならば、神の子、すなわち天の相続人とみなされることは最高に高められたことだとみなすはずである。そしてわたしたちはイエスと共にそのへりくだりのうちを歩めることを喜ぶはずである。しかし、わたしたちの救い主は、十字架のつらい自己否定以外の道から上ろうと望む人々がいると保証なされた。彼らは非難を避け、犠牲を遠ざける。キリストはそのような人々を泥棒、また強盗と呼ばれる。もしわたしたちが反対の嵐に立ち向かおうとしないなら、もしわたしたちが流れのままに漂うことを選ぶなら、永遠の命を失うことになる。……

あなたは罪と苦悩の暗い住まいを後にして、イエスをご自分に従う人々のために用意に行かれた住まいを求めらるであろうか。このお方のみ名によって、わたしたちはあなたにはしごにしっかりと足をかけ、上にのぼるようにと嘆願する。あなたの罪を捨て、あなたの品性の欠点に打ち勝ち、全力を尽くして道であり、真理であり、命であられるイエスにしがみつきなさい。わたしたちはみな一人びとり成功することができる。辛抱しない人はだれも永遠の命に手が届かない。キリストを信じる人々は決して滅びることがなく、またこのお方のみ手から奪う者はない。悪天使たちはキリストをつかむ彼らの手を弱め、彼らの目を地上へ引きつけようとするであろう。しかし、神は彼らを助け、彼らの手を強めるために聖なる奉仕の御使たちをつかわしてくださるのである。（*サイン・オブ・タイムズ* 1884年7月31日）

## 誘惑に直面して

「さて、イエスは御霊によって荒野に導かれた。悪魔に試みられるためである。」  
(マタイ 4:1)

墮落した人類の弱さを負い、〔イエスは〕力強い敵に立ち向かうために荒野へ入られた。それは人類をその墮落の最も低い深みから引き上げることができるためであった。このお方は一人で誘惑の道をたどり、飢えと野心と死よりも強い自制を働かせられるのであった。(パウル・エー 1892 年 11 月 15 日)

キリストは罪人の試練をご存じである。このお方はその誘惑をご存じである。このお方はご自分の身にわたしたちの性質を取られた。このお方はあらゆる点においてわたしたちのように誘惑された。このお方は涙を流された。悲しみの人で病を知っておられた。人としてこのお方は地上で生きられ、人として昇天された。人として、このお方は人類の身代わりであり、人としてこのお方はわたしたちのためにとりなしをするために生きておられる。人としてこのお方は、ご自分を愛し、ご自分がそのために場所を用意しておられる者たちを迎えるために王の権力と栄光を携えて来られるのである。わたしたちは、神が「義をもってこの世界をさばくためその日を定め、お選びになったかたによってそれをなし遂げよう」とされていることを喜び、感謝すべきである(使徒行伝 17:31)。

キリストは罪を犯すことができなかつたと主張する人々は、このお方が人性を取られたことを信じるできない。キリストは実際に誘惑された。荒野においてばかりでなく、全生涯を通じてである。あらゆる点において、このお方はわたしたちと同じように誘惑にあわれた。そしてこのお方があらゆる形の誘惑に抵抗することに成功されたがゆえに、わたしたちに完全な模範をお与えになったのである。わたしたちのための豊かな備えを通して、わたしたちは世にある欲のために滅びることを免れ、神の性質にあずかる者となることができる。(同上 1892 年 11 月 15 日)

人は自分たちの手の届くところに置かれたこの神の力をつかみ、キリストが誘惑の荒野において敵との闘いで模範を与えて下さったように、決心と辛抱強さをもってサタンに抵抗するであろうか。神は人の意志に反して、サタンの策略の力から救うことはおできにならない。人はキリストの神の力によって助けを受けながら、自分の人間の力をもって、いかなる代価を払っても抵抗し、征服するために働かなければならない。つまり、人はキリストが勝利されたように、勝利しなければならぬのである。キリストは完全な勝利者であられた。そしてわたしたちは何一つ不足なく、しみもきずもなく、完全にならなければならぬ。……

このお方は、わたしたちがこのお方の弟子として従わなければならない型であられる。わたしたちは自分の心に利己心を抱きながら、キリストの模範に従うことはできない。このお方はわたしたちのために贖罪をなすために死なれたのである。(同上 11 月 1 日)

1月11日

## 食欲

「そして、四十日四十夜、断食をし、そののち空腹になられた。すると試みる者がきて言った、『もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんさい』。イエスは答えて言われた、『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものであると書いてある』。」(マタイ 4:2-4)

食欲の点における荒野でのキリストの大きな試練は、人に自己否定の模範を残している。この長い断食は、クリスチャンだと公言している者がふけている多くの事柄の罪深さを人に自覚させるべきである。(健康改革者 1878 年 9 月 1 日)

キリストは飢えの最も鋭い痛みに苦しんでいたにもかかわらず、誘惑に対して自制された。このお方は聖書、すなわち荒野で反逆のイスラエル人が食事を制限され、肉をやかましく要求していたときに繰り返してモーセにお与えになったのと同じみ言葉をもってサタンを撃退された。「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものであると書いてある」(マタイ 4:4)。この宣言と、またご自分の模範によって、キリストは、一時的な食べ物に対する飢えは人に降りかかる最大の災難ではないことを示そうとされた。(レビュー・アンド・ヘラド 1874 年 8 月 18 日)

人にとって最も強い誘惑の一つは食欲の点に関してである。思いと体の間には神秘的で素晴らしい関係がある。それらは互いに反応する。体力を発達させ体を健康な状態に保ち、それによって生きた機械のあらゆる部分が調和して働くことができるようにすることが、わたしたちの生活の第一の研究課題となるべきである。体をなおざりにするという事は、頭脳をなおざりにするという事である。神はご自分の子らが病んだ体や発育の妨げられた頭脳をもつことによって栄光をお受けになることはできない。健康を犠牲にして嗜好にふけることは、感覚の不道德な乱用である。飲食においていかなる種類の不節制でもふける人々は、身体的な勢力を浪費し、道徳力を弱めているのである。……

世の贖い主は食欲の放縦が身体的な衰弱をもたらし、知覚的な器官を弱めて聖なる永遠の事柄を識別できないようにすることをご存じであった。キリストは世が暴飲暴食に渡され、この放縦が道徳力をゆがめることをご存じであった。もし人類に及ぶ食欲の放縦が、人間のために、神聖な神の御子とその力をこぼつために 6 週間近い断食をすることを要求するほど強いとすれば、クリスチャンの前には、キリストが勝利されたように勝利するために、なんとという働きがあることであろう。(健康改革者 1875 年 8 月 1 日)

## 憶測

「それから悪魔は、イエスを聖なる都に連れて行き、宮の頂上に立たせて言った、『もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんさい。「神はあなたのために御使たちにお命じになると、あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう」と書いてありますから』。イエスは彼に言われた、『主なるあなたの神を試みてはならない』とまた書いてある。」(マタイ 4:5-7)

サタンは食欲の点に関する最初の誘惑において、キリストの周囲や飢えを、神の恩寵のうちでない証拠として提示することによって、神の御子としてキリストを愛される神の愛と保護に関して疑いをほめかそうとした。彼はこれに成功しなかった。次に彼はキリストがご自分の天父に示された信仰と完全な信頼を有利に用いて、僭越へかりたてようとした。……

僭越の罪は神への完全な信仰と信頼という徳のすぐ傍らにある。……この点において、多くの魂が難破した。サタンはへつらいを通してキリストを欺こうとした。彼は荒野において最も厳しい状況下で、キリストが神が御父であられることを信じるその信仰と信頼は正しいと認めた。それから、彼はキリストに神に完全に依存しているもう一つの証拠を与えなさいとせきたてた。……

世の賤い主はご自分の誠実さから揺り動かされることなく、ご自分の御父の約束された保護を信じる完全な信仰を示された。このお方は敵の手中にあって、極度の困難と危険の立場におられながら、御父の忠実さと愛を不要な試練に持ち出すことはなさらなかった。……

キリストはもし神がご自分に宮から飛び降りることを要求されたのであれば、本当にご自分を支えることがおできになることをご存じであった。しかし、サタンにそうするようにそそのかさされたからといって、命じられていないことをなし、ご自分の御父の守りの保護と愛を試すことは、このお方の信仰の強さを示すことにはならなかった。……

わたしたちの賤い主はここで勝利を得、人の安全はあらゆる試練と危険における神への固い信頼とゆるがない確信のうちにあることを示して、完全な模範を残された。このお方はご自分を救うために神がご自分の力を表さざるを得ないような危険に自らの身を置くことによって、御父の憐れみにつけ込むことを拒まれた。これはご自身の利益のためにみ摂理を強制することになるのであった。そのときこのお方はご自分の民のために神を信じる信仰と固い信頼の完全な模範を残すことがおできにならないのであった。(レビュー・アンド・ハルド 1874年8月18日)

1月13日

## 世への愛

「次に悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華とを見せて言った、『もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう』。するとイエスは彼に言われた、『サタンよ、退け。「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」と書いてある』。」(マタイ 4:8-10)

最初の二つの大きな誘惑においては、サタンは自分の真の目的や品性を表してはいなかった。彼は天の宮廷からの高められた使者であると主張した。しかし、今や彼は自分の扮装を脱ぎ捨てた。パノラマの光景によって、キリストの前に世の全王国を最も魅力的な光のうちに提示しながら、彼は自分が世の君だと主張した。

この最後の誘惑が三つのうちで最も魅惑的であった。サタンはキリストの生涯が悲しみと困難と闘いの生涯となることを知っていた。そして彼はキリストを買取してその高潔さを放棄させるのに、この事実を有利に使えるだろうと考えた。サタンはこの最後の誘惑のために持っている力をすべて注いだ。なぜなら、この最後の努力こそ、だれが勝利者になるかに関して彼の運命を決定するからであった。彼はこの世が自分の領土であり、また自分は空中の権をもつ君だと主張した。彼はイエスを非常に高い山の頂上に連れていき、そこで、久しく彼の領土であった世のあらゆる王国のパノラマの光景を提示し、それらをこのお方に一つの大きな贈り物として差し出した。彼はキリストの側では苦しみや危険なく、世の王国をご自分の所有とすることができると告げた。サタンは自分の王権と支配権を譲ると、そしてキリストは一つだけ願いを聞いてくれるなら正当な統治者になるのだと約束した。彼がその日キリストの前に見せた世の王国を彼のものにする見返りに要求するのは、ただキリストが彼に上位の者として敬意を表することだけであった。

イエスの目は一瞬、ご自分の前に提示された栄光にとまった。しかし、このお方は目をそらし、うっとりさせる光景を見ることを拒まれた。このお方は誘惑者と戯れることによってご自分の揺るがない高潔さを危険にさらすことはなさらないのであった。サタンが敬意を懇願したとき、キリストの神聖な憤りが生じ、もはやサタンの冒瀆的な厚かましさに耐えることも、ご自分の面前に彼がいることをお許しになることもできなかった。……

キリストから去るようにとの言葉、「サタンよ、退け」(マタイ 4:10) は、彼が最初から知られていたこと、また彼のあらゆる欺瞞的な賢さは神の御子に対して成功しなかった証拠であった。(同上 1874年9月1日)

## どのようにみ言葉が広められるか

「その翌日、〔バプテスマの〕ヨハネはまたふたりの弟子たちと一緒に立っていたが、イエスが歩いておられるのに目をとめて言った、『見よ、神の小羊』。そのふたりの弟子は、ヨハネがそう言うのを聞いて、イエスについて行った。イエスはふり向き、彼らがついてくるのを見て言われた、『何か願いがあるのか』。彼らは言った、『ラビ（訳して言えば、先生）どこにおとまりなのですか』。イエスは彼らに言われた、『きてごらんなさい。そうしたらわかるだろう。』（ヨハネ 1:35-39）

イエスは……彼らに言われた、何を探しているのか。弟子たちは自分たちがキリストを探していること、そしてこのお方と親しくなり、このお方の家で教えを受けたいと望んでいることを告白した。これらの二人の弟子たちは、深く印象的でありながら、単純で実際的なキリストの教えに魅了された。彼らの心はかつてこれほど動かされたことはなかった。シモン・ペテロの兄弟アンデレはこの弟子たちのひとりであった。彼は自分の友人や親せきに関心を寄せ、ぜひ彼らもキリストに会い、自分自身でこのお方の貴重な教訓を聞いてほしいと思った。アンデレは自分の兄弟シモンを探しに行き、確証をもってキリスト、メシヤ、世の救い主に会ったと主張した。……翌日、キリストはもう一人の弟子、ピリポを選ばれ、ご自分についてくるようにおなじになった。ピリポはキリストがメシヤであると完全に信じ、そしてキリストの教えを聞かせるために連れてこようと他の人を探し始めた。この教えはそれほど彼を魅了したのであった。それからピリポはナタナエルを見つけた。（預言の霊 2 巻 64）

ここにわたしたちがどのように自分のタラントを両替人に差し出すことができるかという模範がある。ピリポは自分の知識を他の人に伝えた。そして一人の魂をキリストへ連れてきた。天についてわたしたちに与えられた光はこの方法によって他の人々に伝えられなければならない。もしあなたが一人の魂に光を与えたならば、百人を啓発したことになる。なぜなら、その一人がその光を他の人々に伝え、こうしてそれは増え続けるからである。神はわたしが自分の恩恵期間を利己的な娯楽や自己に栄光を帰すために用いることを禁じておられる。神はわたしの魂のためにご自分の愛する御子を与えて下さった。であれば、永遠に住むこのお方は、もしわたしがそのような忘恩と、キリストに魂を勝ち取ることに對する怠慢をあらわすならば、どのようにわたしをご覧になることであろう。（ビュー・アズ・ワルド 1889 年 4 月 30 日）

わたしたちが何に直面しなければならなくても、どんな反対でも、すなわち天来の真理から魂をそらさせるとどんな努力があっても、わたしたちは自分の信仰を公にしなければならない。それは正直な魂が自分自身で見て、聞いて、罪を自覚することができるためである。……学識のある人々は民が不信と偏見でいっぱいになるまで伝統を教えてきた。それでもわたしたちはこれらの人々に「きてごらんなさい」と言わなければならない（ヨハネ 1:39）。（教会への証 6 巻 38）

1月15日

## 低い階級の人々

「ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちのひとり、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。彼はまず自分の兄弟シモンに出会って言った、『わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）にいま出会った』。そしてシモンをイエスのもとにつれてきた。イエスは彼に目をとめて言われた、『あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケバ（訳せば、ペテロ（石））と呼ぶことにする。』」（ヨハネ 1:40-42）

キリスト、道であり、真理であり、命であられるお方は、自己義のパリサイ人たちの横を通り過ぎて、ご自分の弟子たちを無学な漁師や身分の低い人々から選ばれた。一度もラビのところへ行ったことがない人々、預言者の学校で座したことのない人、サンヒドリンのメンバーになったことのない人、心が自分自身の考えに縛られていない人—これらの人々をこのお方は選んで、ご自分の用のために教育された。このお方は彼らをご自分の王国の新しいぶどう酒のための新しい皮袋にすることがおできになった。これらの人々こそ、御父が霊的な事柄を明らかにすることのできる幼子であった。しかし、祭司たちや役人たち、学者やパリサイ人たちは、知識の保管者だと主張していたが、後にキリストの使徒たちによって教えられたキリスト教の諸原則のための場所がなかった。真理の鎖は、次々と、自分自身の無知を自覚し、偉大な教師から学びたいとの志を持っていた人々に与えられた。

イエスは学者やパリサイ人たちが自ら自己尊大を空にしなければ、ご自分が彼らのために何も利することができないことをご存じであった。イエスはご自分の教理という新しいぶどう酒のために新しい皮袋を選ばれ、漁師や無学な信徒たちをご自分の真理の世に対する先駆けとされた。しかし、このお方の教理は人々に新しいように見えたが、実は新しい教理ではなく、初めから教えられてきた意味の啓示であった。ご自分の弟子たちが率直で、混じり物のない真理を自分の生活の導き手とすることがこのお方のご計画であった。彼らはこのお方の言葉に加えても、あるいはこのお方の言われたことに無理な意味を施してもならなかった。彼らは聖書の率直な教えに神秘的な解釈をつけ、神学的な蔵から引き出して、人の作った理論を打ち立ててはならなかった。……

聖霊は何も誇ることでできない心に入られる。イエスの愛は、自己が空にされることによって空いたところを満たすのである。（ビュー・アード・ヘルド 1896年6月2日）

わたしたちの贖い主は人類のために最大限に可能な犠牲を払われた。こうしてこのお方はご自分のわたしたちに対する評価を示された。あなたはこのお方を最も喜ばせることができるように働こうと願うであろうか。武具に身を固め、主の戦いを雄々しく戦いなさい。キリストは人間の猟師や漁師である人々に恵みを与えて下さる。（同上 1899年7月11日）

## 婚宴での奇跡

「イエスは彼らに『かめに水をいっぱい入れなさい』と言われたので、彼らは口のところまでいっぱいに入れた。……料理がしらは、ぶどう酒になった水をなめてみたが、……花婿を呼んで言った、『どんな人でも、初めによいぶどう酒を出して、酔いがまわったところにわるいを出すものだ。それなのに、あなたはよいぶどう酒を今までとっておかれました。』」（ヨハネ 2:7, 9, 10）

〔キリストが〕ご自分の最初の奇跡の場で有毒なぶどう酒を作られたのではないことをはっきりしておきなさい。このお方は全人類に与えて安全な飲み物—純粋なぶどう汁—を出席者にお与えになったのである。キリストはご自分の唇にも、ご自分の弟子たちの唇にも、決して発行した酒のグラスをつけることはなさらなかった。パレスチナでは酔っ払いはまれであったが、キリストは後の時代をながめて、各世代にぶどう酒の使用が用いるものに何をなすかをご覧になった。そのためにこの宴において正しい模範を残されたのである。

キリストはご自分の行為を公にされなかった。そのため、最初に料理がしらの当惑を知っていたのはわずかであった。しかし、新しいぶどう汁が持ち込まれた後、最初に彼らの前に用意されたぶどう酒にまさるその素晴らしさについて、客が大きな驚きを表明した。奇跡は知られるようになり、まさにキリストが戒し遂げられるのを見たいと願っておられた働きが成し遂げられた。弟子たちの信仰が確立されたのである。……

イエスはかめに触れられなかった。ただそれをご覧になっただけであった。するとたちまちそれは房からのしぼりたてのような新鮮なぶどう汁になった。ほんの数日前、キリストはご自分の飢えを満たすために奇跡を働くことを拒まれたのであった。このお方は弱く、やせ細っておられた。なぜなら、40日40夜、食べ物を取っておられなかったからである。しかし、このお方はご自分の食欲を満足させるために、石にパンになるよう命じようとはなさらなかった。敵の提言に対して、このお方は次のようにお答えになった、「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」（マタイ 4:4）。また、このお方はご自分が神の御子であることを証明するために、宮のてっぺんから身を投げてご自分の命を危険にさらすようにとの挑戦をお受けにならないのであった。挑戦に答えて、このお方は「主なるあなたの神を試みてはならないとまた書いてある」と言われた（7節）。しかし、婚宴の席で、このお方は結婚が神に禁じられていないことを示すために奇跡を働かれた。

キリストから発散している神聖な愛は人間の愛を決して破壊することはない。かえって、それを包含するのである。神聖な愛によって、人間の愛は精錬され、純潔にされ、高められ、高尚にされる。人間の愛は、神聖な性質と結合し、天へ向かって成長するよう訓練されない限り、決して尊い実を結ぶことができない。イエスは幸せな結婚、幸せな炉辺を見たいと望んでおられる。（パウル・エー- 1899年9月4日）

1月17日

## 宮での第一の優先事項

「さて、ユダヤ人の過越の祭が近づいたので、イエスはエルサレムに上られた。そして牛、羊、はとを売る者や両替する者などが宮の庭にすわり込んでいるのをごらんになって、なわでむちを造り、羊も牛もみな宮から追いだし、両替人の金を散らし、その台をひっくりかえし、はとを売る人々には『これらのものを持って、ここから出て行け。わたしの父の家を商売の家とするな』と言われた。」(ヨハネ 2:13-16)

宮の汚れと清めに、この時代のための教訓がある。信心を利益に、内面の純潔を外面の見せかけに取り替えるよう導くユダヤ人の間に存在していたのと同じ精神が、今日、クリスチャン世界の呪いとなっている。それは神の礼拝者だと公言する人々の間で、汚すらい病のように広がっている。聖なる事柄が世の虚しい事柄の水準に引き下ろされている。悪徳が徳だと、また義が犯罪だと誤ってとらえられている。一時的な事業が神の礼拝と混ぜ合わされている。搾取と邪悪な投機がいと高さお方のしもべだと公言する人々によって実践されている。(預言の霊 2巻 123)

キリストは天の聖所で民の罪から宮を清めておられる。そしてわたしたちは地上でこのお方と調和して働き、魂の宮を道徳的な汚れから清めなければならない。もし、わたしたちがこのように働くなら、神の御霊の芳しい感化力がわたしたちの生活の中で働くことをわかるようになる。恵みと平安と力が、紛争と弱さにとって代わり、失望と闇を話す代わりに、神の光と愛と喜びを語るようになる。わたしたちは見えない事柄、すなわち一時的なものではなく、永遠のものを見るようになる。わたしたちがこの働きに携わるとき、神の御使たちは神聖な力を伝達し、人間の弱さに天の力を結合させるために近く来てくれる。そのとき、わたしたちは自分たちの主のすがたへと成長するのである。わたしたちはどのようにしてこのお方を信じるかを学び、どのようにして自分の魂を忠実な創造主としてのこのお方に委ねるかを学ぶようになる。使徒は次のように言っている、「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである」(ピリピ 2:13)。そして、結果として、わたしたちの精神的、また霊的な力は増す。わたしたちがキリストから学ぶとき、どのようにして自分の霊的な力を保つかを理解し、神のみ言葉に養われ、次の言葉で使徒によって描写された祝福の経験を得るようになる。「あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいけなけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜び(と満ち満ちた栄光)にあふれている」(ペテロ第一 1:8)。(ビュー・アット・ワルド 1890年2月11日)

1月18日

## 神の御霊は目に見えないが働いている

「あなたがたは新しく生れなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生れる者もみな、それと同じである。」  
(ヨハネ 3:7, 8) .

〔イエスは〕ご自分が意味するところの説明として風をお用いになった。それは木々の枝のあいだで聞かれ、葉や花をサラサラといわせるが、目には見えず、どこから来てどこへ行くのか、だれにもわからない。御霊によって生まれるすべての人の経験も同様である。思いは、触れることのできる結果を生む目に見えない神の代理者である。その感化力は力強く、人の行動を統制する。もしすべての悪から清められるならば、それは善の原動力である。再生させる神の御霊が思いを所有し、生活を変える。悪い思想は取り除かれ、邪悪な行為は捨てられ、愛、平和、謙遜が、怒り、妬み、紛争にとって代わる。人の目には見えない力が、新しい存在を神のみかたちのうちに創造したのである。……

心は天の御国にふさわしくされる前に、神の御霊によって生来の汚れから清められなければならない。……〔キリスト〕はちようど宮の聖なる庭を商売と搾取の場所とすることによって墮落させてきた人々を追い出すことによって、宮の清めに携わられた。その日にイエスのみ前から逃げた人はだれも、神の恵みによって宮の聖なる奉仕に関わりを持つのにふさわしい者とされなかった。確かに、パリサイ人の中にはユダヤ国家を墮落させ、宗教的な儀式を汚していた悪を深く悲しんでいる誉ある人々がいくらいた。彼らはまた真の聖潔が、伝統や無意味な形式に取って代わられてしまったのを見たが、これらのますます大きくなる悪を防ぐには無力であった。……

民の大きな必要は、道徳的な新生、彼らを汚していた罪を取り除くこと、真の知識と本物の聖潔が新たにされることであった。この宮の清めは永遠の命を獲得したいすべての人のうちに成し遂げられなければならない働きを描写している。忍耐づよく、イエスはニコデモに救いの計画を明らかにし、どのようにして御霊によって生まれるすべての魂に、聖霊が光と変化の力をもたらすかを彼に示された。風のように見えないが、その効果ははっきりと見ることができ感じることもできるのが、心に及ぶ神の御霊のバプテスマであり、それ自体その救いの力を経験する人の一つ一つの行動において現れるのである。(預言の霊 2 巻 128-130)

1月19日

## 光のために説明責任がある

「神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。」(ヨハネ 3:17, 18)

もし、わたしたちが理性ある存在であり、光がわたしたちに伝えられたのであれば、それに対して責任がある。……イエスの働きは過去の罪を許すことであるが、もし、光が天から教会にもたらされ、それを受け入れることには十字架が伴うという理由で人々が光を拒むならば、そのとき、彼らは神のみ前に有罪となる。なぜなら、彼らは自分たちがキリストと真理を愛するよりも、世を愛するということが明らかにされたからである。真理を聞く機会がありながら、それを聞かなければ責任はないと考えて、真理を聞いて理解するために何の労苦も払わない人々はあたかもそれを聞いて拒んだかのように神のみ前に有罪と判断される。何が真理であるかを理解することができるときに、過ちに行くことを選ぶ人々に言い訳の余地はない。イエスはその苦しみと死のうちに、すべての無知の罪のために贖罪をなされたが、故意の盲目のための備えはない。罪を自覚させられることがないように、自分たちの目を真理から隠してきた人々は、神の律法の違反のために、神に対する悔い改めを働かせなければならない。……

わたしたちは自分たちの知覚に届いたことのない光に対して責任を問われることはない。そうではなく、わたしたちが抵抗し、拒んだ光に対してである。人は一度も自分に提示されたことのない真理を理解することはできなかつた。であるから、一度も得たことのない光に対して責めを受けることはあり得ないのであつた。しかし、もし彼にメッセージを聞き、真理を知るようになる機会がありながら、なおその機会を生かすことを拒んだならば、彼はキリストが次のように言われた人々の数に入るのである、「しかも、あなたがたは、命を得るためにわたしのもとにこよともしない」(ヨハネ 5:40)。意図的に自らの身を真理を聞く機会のないところへ置く人々は、真理を聞いて、その数々の証拠を頑固に拒んだ人の中に数えられる。(ビュー・アソド・ハルド 1893年4月25日)

わたしたちが神の律法の違反を通して自分たちを破滅させる道を取ることを避けるために、国家や個人に対する神の取り扱いを厳粛に考えてみよう。わたしたちに与えられた警告、譴責、憐れみのしるしの中にある一つ一つの祝福、一つ一つの天来の光線、を蓄えよう。神の寛容を軽く考える人々の中にいないようにしましょう。(同上 1893年5月2日)

1月20日

## バプテスマのヨハネの態度

「〔バプテスマの〕ヨハネは答えて言った、人は天から与えられなければ、何も受けることはできない。『わたしはキリストではなく、そのかたよりも先につかわされた者である』と言ったことをあかししてくれるのは、あなたがた自身である。……彼は必ず栄え、わたしは衰える。」(ヨハネ 3:27, 28, 30)

ヨハネが自分の使命に感じていたよこびは別として、彼の一生は喜びのない一生であった。それは悲しみと自己否定の一生であった。キリストの初臨の先駆けであった彼は、個人的にキリストの言葉を聞いたり、このお方によって表された力を目撃したりすることが許されなかった。彼の声は荒野よりほかのところではめったにきかれなかった。彼の生涯は孤独であった。多大な群衆は素晴らしい預言者の言葉を聞きに荒野へ群がった。彼は木の根元に斧をおいていた。彼は結果を恐れず罪を譴責し、キリストの公生涯のために道を備えたのであった。(同上 1873年3月4日)

キリストのために働く人々は、大いに分別を持つ男女であるべきである。こうして彼らの教理を理解しない人々が彼らを尊敬し、彼らを狂信のない、また無分別や性急な行動のない人々だとみなすためである。……あなたがイエスを高め、自己を隠しているのを人々が見るようにしなさい。あなたの心の意向は「彼は必ず栄え、わたしは衰える」であるべきである(ヨハネ 3:30)。このお方の比類のない力と恵みを高めなさい。しかし、自己を十字架につけ、キリストのうちに隠しなさい。(同上 1892年4月26日)

わたしたちの魂を神から引き離している最大の罪は、不信と心の頑なさである。なぜわたしたちはこれほど不信で、感じない者なのであろうか。その理由は、わたしたちが自信に満ちているからである。わたしたちは自分が足りていると感じている。もしわたしたちが何か神の祝福のしるしを受けるならば、それを自分たちが大丈夫である保証としてとらえる。そして譴責されると、次のように言うのである、『わたしは神がわたしを受け入れてくださったことを知っている。なぜなら、神がわたしを祝福してくださったからである。だから、わたしはこの譴責は受け入れない』。もし主がわたしたちを祝福されなかったとしたら、わたしたちはなんとという恐ろしい状態にいてであろう!わたしたちはキリスト、すなわち神がわたしたちに与えて下さった神のご品性の型を研究しなければならない。もしわたしたちが切らなければならない衣服を持っているなら、型をよく調べる。そしてクリスチャン生活では、自分自身の考えや計画を捨て、型に従って行かなければならない。……わたしたちは自負心でいっぱいになるべきではない。わたしたちはヨハネが言ったように、「彼は必ず栄え、わたしは衰える」と言わなければならない(ヨハネ 3:30)。(同上 1889年8月27日)

あなたの命はキリストと共に神のうちに隠れなければならない。自己はキリストのうちに隠されなければならない。天には、偉大な「わたしは有る」お方以外に、偉大なわたしはいない。であるから、わたしたちは民の前にキリストを掲げ、このお方は必ず栄え、わたしは衰えるという事実を自覚し、喜ぶことを学ばなければならない。(サイン・オブ・タイムズ 1892年2月22日)

1月21日

## 生ける水の泉

「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであらう。」(ヨハネ 4:14)

魂の中のキリストの恵みは、永遠の命へ湧き上がる水の泉として表されている。……世は神がご自分の民に委ねられた厳粛な真理によって警告されなければならない。そして教会の状態は、これらの真理のために、あるいはそれらに反してのいずれかにその印象を残すのである。滅びつつある世は生けるクリスチャンの男女、すなわちキリストが宿っており、日々の生活にキリストが現れている人々を必要としている。(ビュー・アズ・ヘラルド 1886年10月19日)

人類の大部分はこの世の事柄に没頭しており、そして神聖な真理は彼らの心のうちに宿る場所を見出すことができない。それでいながら、世が与えることのできるすべての祝福では、魂の欠乏を満たすことができない。自分が持っていない何か、地上から生じたのではない平安や休息に対する言い表せない切望がある。昔の宮における礼拝者たちもこのようであった。人目を引く儀式、まばゆい展示、音楽と祝いの中でも、彼らはおも満足していなかった。そのとき、彼らの耳に飛び込んだ招きはどれほど歓迎されたことであろう、「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい」(ヨハネ 7:37)。サマリヤの女の心をヤコブの井戸端で喜ばせたのは同じメッセージであった、〔ヨハネ 4:13, 14 引用〕。キリストだけが人の魂の中にある欠乏感を満足させることができる。このお方の恵み深い招きが、わたしたちの時代にまで届いている。命の泉なるお方から、なおも失われた世に叫びが出ている、「わたしのところにきて飲むがよい」。(同上 1882年2月28日)

キリストは、ヤコブの井戸端で、サマリヤの女の罪深い生活と品性をあらわにされた。「不必要であり、無礼である」と多くの人は言う。イエスはこれだけが、この場合、手を差し伸べる道であることをご存じであった。(サインズ・オブ・タイムズ 1876年6月15日)

このお方はサマリヤの女との会話において、ヤコブの井戸をけなす代わりに、キリストはそれより良いものを提示された。……このお方はご自分が与えようとしておられた宝へと会話を向け、彼女が持っているよりも良いもの、すなわち生ける水、福音の喜びと希望を差し出された。これこそ、わたしたちが働くべき方法である。わたしたちが娯楽愛好者や劇場常連、酔っ払い、賭博者のところへ行つて、その罪を痛烈に譴責しても、ほとんど役に立たない。これは何の益にもならない。わたしたちは彼らが持っているよりも良いもの、人知を超えたキリストの平安を彼らに提示しなければならない。わたしたちは神の聖なる律法、すなわちこのお方のご品性の写し、彼らになつてほしいと願つておられる内容を、彼らに語らなければならない。(同上 1904年3月23日)

## 彼が求めた以上に

「〔ある役人〕が、ユダヤからガリラヤにイエスのきておられることを聞き、みもとにきて、カペナウムに下って、彼の子をなおしていただきたいと、願った。その子が死にかかっていたからである。そこで、イエスは彼に言われた、『あなたがたは、しるしと奇跡とを見ない限り、決して信じないだろう』。この役人はイエスに言った、『主よ、どうぞ、子供が死なないうちにきて下さい』。イエスは彼に言われた、『お帰りなさい。あなたのむすこは助かるのだ』。(ヨハネ 4:47-50)

役人が自分の息子を癒してくださるよう〔キリスト〕の許へ願いに来たとき、このお方は彼らの不信に対する譴責をもって彼に応じられた。……〔役人は〕大いに失望していただけでなく、悔しい思いをしていた。待ちきれないような思いで、またわずかでも遅れれば自分の息子の死という結果を招くのではないかという恐怖から、彼は「主よ、どうぞ、子供が死なないうちにきて下さい」と言った(ヨハネ 4:49)。イエスはついに恵み深く彼の要求に応じられた。しかし、今日、どれほど多くの人々が自分自身の生来の心の感情が自分たちの判断をしのぐことを許し、いらだってキリストの働かれる方法に甘んじないことであろう。彼らは言うのである、「なぜみ言葉で直ちに息子を癒すことがおできになるのに、父親に痛みを与え、見たところ失望させるのか」。キリストはご自分の動機や目的を人に説明することが求められているとはお感じにならなかった。このお方は拒絶が親の弱い信仰を拡張させるよう意図され、それにはその効果があったのである。(同上 1876年6月15日)

贖い主の言葉はカナからカペナウムまで稲光のようにひらめく。そして子供は癒される。役人はイエスのご臨在を強く要求しないことによって、自分の信仰を示す。  
……

彼が病気から完全に癒された自分の息子を見ると、霊的な命が彼の魂を聖化する。彼は改心する。幼子のような単純な信仰をもって、彼は天の御国の偉大な賜物を受ける。子供を健康へ回復したのと同じ力が父親の心から不信を追い出す。

この役人はなんとというキリストの証人であろう！彼が自分の息子の命のために求めたとき、自分自身が何かを受けることは期待していなかった。しかし、彼は偉大な力が自分の魂をとらえたことを悟った。彼はキリストを体の医者であると同時に魂の医者であられることを認めた。……

キリストのためのわたしたちの働きにおいて、わたしたちは役人の質問しない信仰をもっと必要としている。〔ヘブル 11:1 引用〕。信仰によって、わたしたちは神のみ約束のうちに神を眺め、不変性をもって武装されるのである。クリスチャンは自分がどなたを信じているかを知っている。彼は聖書を読むだけでなく、その教えの力を経験する。彼はキリストの義について聞いたことがあるだけでなく、魂の窓を義の太陽の光に向かって開いてきたのである。(ユース・インストラクター-1902年12月4日)

1月23日

## 麻痺状態から救出される

「さて、そこに三十八年のあいだ、病気に悩んでいる人があった。……イエスは彼に言われた、『起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい』。すると、この人はすぐにいやされ、床をとりあげて歩いて行った。その日は安息日であった。』(ヨハネ 5:5, 8, 9)

〔この男の〕病気は主として彼自身の悪習の結果であり、神の罰とみられていた。孤独で友もなく、神の情からも捨てられたように感じながら、この苦難者は、悲惨な年月をすごしてきた。(ミストリー・オブ・ヒーリング 54)

イエスはこの中風の人に何も神の助けを約束なさったわけではなかった。……彼はいやされる唯一の機会を疑いのために失ったかもしれない。しかし彼はキリストの言葉を信じ、自分がいやされたと信じた。そしてすぐに努力をしたので、神は彼に力を与え、彼は歩こうと志し、そして歩いた。キリストの言葉に従って行動し、いやされたのである。

わたしたちは罪によって神の生命から切り離されている。わたしたちの心は麻痺している。この無力な人が歩けなかったのと同じように、わたしたちも自分自身の力できよい生涯を送ることはできない。多くの人は自分の無力を悟り、神と調和することができるような精神生活を切望し、これを得ようとして努力している。しかしできないのである。絶望して「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」と叫ぶ(ローマ 7:24)。失望しながらもがいている人々は上を見あげなさい。……彼は、わたしたちが健康と平安をもって立ちあがるようにお命じになる。いやされたことを感じるまで待つてはならない。救い主のお言葉を信じなさい。あなたの意志をキリストの側に置きなさい。彼に任せようとして決心し、そのお言葉に従って行動するとき、力を受けるのである。どんな悪習慣に染んでいても、また長年ほしいままにした情欲が心身を束縛していても、キリストは救おうと望み、また救うことがおできになるのである。(同上 56)

もしこの男が、「それは不可能です!わたしの意志に38年間も従ってこなかった両脚を、いったいどうして今用いることを期待できるでしょう」。単に人間的見地から言えば、そのような理論はもつともらしく見える。……しかし、そうではない。質問せずに、彼は自分の唯一のチャンスをとらえた。彼はキリストが命じられたことをなそうと試みた。力と活力がもたらされた。彼は完全に癒されたのである。

疑う読者よ、あなたは主の祝福を受けるであろうか。このお方の言葉に疑問をはさみ、このお方の約束に信頼しないことをやめなさい。救い主のご命令に従いなさい。そうすればあなたは力を受ける。もしあなたがためらい、サタンとの議論に入るなら、あるいは困難や可能性を考えるなら、あなたの機会は過ぎさり、おそらくは二度と戻ってこないのである。(サインズ・オブ・タイムズ 1882年6月8日)

## 迫害されている者への慰め

「わたしにつまずかない者は、さいわいである。」(ルカ 7:23)

ヘロデは、ヨハネの力強く、するどいことばをきいて心を動かされ、深い興味をもって彼の弟子になるにはどうすべきかを問うた。ヘロデは、自分の兄弟がまだ生存しているのに、その妻をめとろうとしていた。ヨハネはそのことを知っていたので、それが正しくないことを忠実にヘロデに告げた。ヘロデはどんな犠牲もはらいたくなかった。ヘロデは兄弟の妻と結婚し、彼女の影響で、ヨハネを捕えて投獄した。しかし、いずれヨハネを釈放するつもりだった。(初代文集 268)

バプテスマのヨハネは、ヘロデの放縦と不法な結婚に対して恐れを知らない証を担ったがゆえに牢獄に閉じ込められていたが、そこで失望が訪れた。彼は思った、なぜキリストはわたしを牢獄から救い出すためにご自分の力を行使されないのであろう。彼は次の問いをもって自分の弟子たちをキリストの許へ遣わした、「『きたるべきかた』はあなたなのですか。それとも、ほかにだれかを待つべきでしょうか。」(ルカ 7:19)。(原稿リ-ス 15 巻 261)

キリストはこれらの使者たちが何の用事できたのかをご存じであった。そして力強いご自分の力の現れによって、このお方は彼らにご自分の神性の間違いのような証拠をお与えになった。(サイン・オブ・タイムズ 1896 年 9 月 17 日)

キリストはご自分に従う人々に、なだらかで簡単な道を約束してはおられないが、彼らにクリスチャンの道を一歩進むことも求めてはおられない。「わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう。あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのであるから、あかしをするのである。わたしがこれらのことを語ったのは、あなたがたがつまずくことのないためである」(ヨハネ 15:26-16:1)。キリストはご自分の弟子たちに将来についての真理を語られた。それは彼らに試練が訪れたときに、失望と疑いに陥ることがないためであった。バプテスマのヨハネが首を切られたとき、彼の弟子たちはキリストがご自分の僕を救うために奇跡を働かれなかったがゆえに、責めたい気持ちになっていた。同様に今日、キリストがわたしたちのために奇跡を働き、わたしたちの敵を辱められないからといって不満に思う危険性がある。「人々はあなたがたを会堂から追い出すであろう」(ヨハネ 16:2)。これがなされてきたのではないだろうか。拘束力のある神の律法の要求に関して光を受け入れてきた人々、第四条の安息日の戒めを良心的に守ろうと決心してきた人々は、諸教会から追い出されなかったであろうか。しかし、彼らは神の御目に尊いのである。(レビュー・アンド・ワールド 1898 年 4 月 19 日)

1月25日

## 救い主のご臨在のうちにある力

「〔イエスは〕シモンに『沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい』と言われた。

シモンは答えて言った、『先生、わたしたちは夜通し働きましたが、何も取れませんでした。しかし、お言葉ですから、網をおろしてみましよう』。そしてそのとおりにしたところ、おびたしい魚の群れがはいって、網が破れそうになった。』  
(ルカ 5:4-6)

生きた信仰のうちに、イエスの栄光だけに目を留めて、イエスに従うすべての人は、漁師たちが奇跡的な収穫で自分の舟がいっぱいになるのを見たのと同じくらい確かに神の救いを見るであろう。彼らが魚を獲る努力において成功したのは、キリストが彼らの舟におられたからであった。救い主の内なるご臨在が、魂を勝ち取る働きにおいて等しく必要である。……

わたしたちは誘惑に抵抗するために自分自身の力で努力し、克服するために最善を尽くすかもしれない。しかし失望に次ぐ失望に会うのである。そしてこれは男女を救い主に勝ち取るわたしたちの努力においても同様である。自分自身の知恵に頼るとき、結果は繰り返される失敗であり、わたしたちに多くの不安と悲しみをもたらす。これこそ、ガリラヤの海辺で報われない労働の夜の後、キリストが漁師たちを見出されたときの心の状態であった。その夜長い間、漁師たちは労したのであった。しばしば彼らは失望した。何度も空の網を引き揚げた。しかし、今聖なるお方のご命令で、彼らは深いところへ漕ぎ出て、もう一度網を海におろした。そして彼らはなんとおびたしい量の魚を捕獲したことであろう！奇跡的な水揚げの光景は彼らの不信を一掃し、彼らは救い主の召し、すなわちこのお方に従い人間を捕る漁師になるために学ぶようにという召しに応える用意ができた。

破れる網、沈む舟、ペテロと仲間たちの驚きと感謝、救い主に従い、命じられたことをしようとする彼らの自発的な心—これらはみな、わたしたちにとって魂を救う働きにおける実物教訓である。しかし、長く忠実に自分たちの人間の努力で労しても、わたしたちは良い結果を何も期待できない。しかし、キリストを心に迎えた途端、このお方はわたしたちと共に、わたしたちを通して、魂の救いのために働かれるのである。神はご自分の目的と調和して労することを選ぶ人々と協力すると約束された。……

このお方のご臨在がわたしたちと共になければ、わたしたちの努力は無に等しい。わたしたちは自分たちの同胞にこのお方の祝福が流れていく水路にすぎない。キリストが永住される心を持つ一人ひとりから、他の人が救い主を自分の贖い主として受け入れるように感化する力が出ていくのである。(同上1903年8月27日)

## 慎重さを伴う憐れみ

「イエスがある町におられた時、全身らい病になっている人がそこにいた。イエスを見ると、顔を地に伏せて願って言った、『主よ、みこころでしたら、きよめていただけるのですが』。イエスは手を伸ばして彼にさわり、『そうしてあげよう、きよくなれ』と言われた。すると、らい病がただちに去ってしまった。イエスは、だれにも話さないようにと彼に言い聞かせ、『ただ行って自分のからだを祭司に見せ、それからあなたのきよめのため、モーセが命じたとおりのささげ物をして、人々に証明しなさい』とおおじになった。」(ルカ 5:12-14)

恐ろしい病かららい病人を清めたキリストの働きは、罪から魂を清めるこのお方の働きの実例である。イエスの許へ来た男は、「全身らい病になってい」た。その致命的な毒は全身に蔓延していた。弟子たちは自分たちの主人に彼を触らせまいと努めた。なぜなら、らい病人に触れる者はその人自身汚れるからである。しかし、イエスはこのらい病人の上に手を置かれても、汚れを受けられなかった。

このお方の接触は、命を与える力を与えた。らい病は清められた。罪というらい病—深く根差し、致命的で、人間の力では清めることのできない病気も同様である。「足のうらから頭まで、完全なところがなく、傷と打ち傷と生傷ばかりだ」(イザヤ 1:6)。しかし、人類のうちに宿るために来られたイエスは、汚れをお受けにならない。このお方のご臨在には罪人のための清めの力がある。だれでもこのお方の足元に伏して、信仰のうちに「主よ、みこころでしたら、きよめていただけるのですが」と言う者は、「そうしてあげよう、きよくなれ」という答えを聞くのである(マタイ 8:2, 3)。救い主は、どんなに罪のうちに沈んでいても、天の尊い真理を受けたいと願う魂を決して一人も通り過ぎしたりはなさらない。(サイン・オブ・タイムズ 1905年10月25日)

主は、病人を癒されることによって、盲人の視力を回復するために奇跡を働かれることによって、またらい病人を清めることによって、ご自分の命を危険にさらしておられることをご存じであった。なぜなら、もし祭司や役人たちがご自分の神聖な使命について彼らに与えられた証拠を受け入れようとしなければ、彼らは誤った意味に解釈し、偽り、そしてご自分に対して告発するからであった。確かにこのお方は公に数多くの奇跡をなされた。しかし、ある場合には祝福された人々に、ご自分が彼らのために何をなされたかを話さないよう要求された。……イエスが秘しておくべきと意図されたことを他の人々に公表し、真理のみ事業に非難と損害をもたらすことは、聖なる信任の裏切りであった。(ビュー・オブ・ヘルト 1893年8月22日)

1月27日

## 改心した取税人

「そのち、イエスが出て行かれると、レビという名の取税人が取税所にすわっているのを見て、『わたしに従ってきなさい』と言われた。すると、彼はいっさいを捨てて立ちあがり、イエスに従ってきた。」(ルカ 5:27, 28)

イエスがエルサレムへ向かわれる途中、〔レビ・〕マタイが取税の仕事に携わっているのをご覧になった。彼はユダヤ人であったが、彼が取税人となったとき、彼の兄弟たちは彼を蔑んだ。ユダヤ民族は絶えずローマのくびぎのためにいらだっていた。この蔑まれた異教国家が自分たちから貢物を集めるということが、独立国家としての自分たちの力と栄光が去ってしまったことを思い出させるのであった。彼らの憤りは、自分自身の同族のひとりが税の取り立ての職を受け入れるほど自分の高められた民族の誇りを忘れてしまうとき、とどまることを知らなかった。

このようにローマ当局を支えるために援助している人々は背教者とみなされた。ユダヤ人はいかなる方法であれ取税人と交わることは墮落することだとみなした。彼らはその職業を抑圧や強要と同一にみなした。しかし、イエスのみ思いは、パリサイ人たちの偏見によって形作られてはいなかった。このお方は表面の下をご覧になり、心を読まれた。このお方の神聖な目は、マタイのうちにご自分の教会を設立するためにお用いになることができる者であることをご覧になった。この男はキリストの教えを聞いていた。そしてこのお方に惹かれていた。彼の心は救い主への敬神に満ちていたが、マタイはこの偉大な教師がご自分に目を留められるほどへりくだられるとは、まして自分を弟子の一人に選ばれるとは夢想だにできなかった。であるから、イエスが彼に「わたしに従ってきなさい」と言われたときの彼の驚きは大きかった。

疑い深いつぶやきや自分の金銭的な損失に関する疑問なしに、マタイは立ち上がって、自分の主人に従い、そして数名のイエスの弟子たちと利害を一つにした。蔑まれた取税人は、救い主が自分には不相応な誉を授けて下さったと感じた。彼は自分が貧困と疲労のために取り替えた実入りの良い仕事のことは考えなかった。キリストのご臨在のうちにあり、このお方の唇から知恵と善を学び、このお方の素晴らしいみわざを見、その骨折り仕事においてこのお方の共労者となれるだけで充分であった。

マタイは裕福であったが、すべてを自分の主人のために喜んで犠牲にした。彼には、イエスに従う者にしたいと切望した多くの友人や知り合いがいた。そこで彼は彼らがこのお方に会う機会を設けたいと願っていた。(預言の霊 2 巻 186-188)

## 奉仕における祝宴は、誇りにおける断食よりも高尚

「それから、レビは自分の家で、イエスのために盛大な宴会を催したが、取税人やそのほか大ぜいの人々が、共に食卓に着いていた。ところが、パリサイ人やその律法学者たちが、イエスの弟子たちに対してつぶやいて言った、『どうしてあなたがたは、取税人や罪人などと飲食を共にするのか』。イエスは答えて言われた、『健康な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。』」(ルカ 5:29-32)

仕事や娯楽や罪において自分の仲間であった人々を共に招き、〔レビ・マタイ〕は救い主のために大宴会を催した。もしイエスが自分を、すなわちこれほど罪深く無価値なものを招いてくださったのであれば、当然自分のかつての仲間たち、すなわちマタイが自分自身よりはるかにその価値があると思った人々を受け入れてくださるにちがいない。マタイは彼らがキリストの憐れみと恵みの恩恵にあずかるのを見たいと大いに切望した。彼はキリストが、学者やパリサイ人のように取税人や罪人を蔑んだり、憎んだりなさらないことを彼らに知ってもらいたいと願った。彼は彼らにキリストを祝福された救い主として知ってほしかった。……

イエスはそのような祝宴への招きを拒まれたことは決してなかった。つねにこのお方のみ前にあったご目的は、ご自分の聴衆の心の中に真理の種をまくということ—その心を勝ち取る会話を通して、人々の心をご自分に引きつけることであった。……

誇りは高いが愚かなパリサイ人、紛争と口論のために、また悪のこぶしをもって打つために断食をする者たち!キリストが取税人や罪人たちと食されたのは、ご自身に彼らを引き寄せるためであった。世の贖い主はユダヤ国家によって守られた祝宴を尊ぶことがおできにならなかった。彼らは誇りと自己義のうちに断食するが、キリストは謙遜のうちに取税人や罪人たちと共に食されるのである。

墮落以来、サタンの働きは告発することである。そして神が送られる光を拒む人々は今日同じ道をたどるのである。彼らは自分が罪だと考えることを他の人々に公開する。パリサイ人もそうであった。彼らが何か弟子たちを告発できるを見つけると、過ちに陥っていると思われる人に告げるのではなかった。彼らはキリストの弟子のうちに自分たちが非常に嘆かわしいと思うことについてキリストに告げた。キリストが罪を犯したと彼らが思ったときには、このお方を弟子たちに告発した。心を分離させるのが彼らの働きである。……

あわれな取税人や罪人たちは自分たちが助けを必要としていることを感じた。そして、彼らはキリストが自分たちに与えることがおできになると知っていた教えと助けを受け入れた。(※イブズ・オブ・タイムズ 1898年6月23日)

1月29日

## キリストの使命を反映する

「人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである。」(ルカ 19:10)

キリストは……まさに人類の苦悩とみじめさの深みへ手を差し伸べるために来られた。このお方は困窮している者、苦しんでいる者、抑圧されている者に手を差し伸べることができるところ、すなわち彼らのいるところへ自らの身を置かれた。そして、まったく見たところ、彼らは最も見込みのない者であつたにもかかわらず、なんとという激しい関心をもってこのお方は彼らのために働かれたことであろう！彼らのご自分に向かって心を開いていき、こうして彼らをご自分の変化させる恵みで満ち、ご自分の自己否定と自己犠牲の精神を吹き込むことができるようになるのをご覧になったとき、なんと聖なる喜びがこのお方の心の内に起こったことであろう。このお方はご自分の御国の祝福にあずかる特権をもって人類を尊ぶために来られた。このお方は自分たちの罪を悔い改め、ご自分の許しの愛を受け、そして真理の種をまき、今にも滅びようとしている魂のために労することにおいてご自分と一つになるように彼らを招かれた。

キリストに当然ささげべき奉仕以上の奉仕を捧げることはできない。もし、あなたがパリサイ人のように自己満足の精神を持っているなら、もし自己義の衣を自分にまきつけ、罪人を闇と不法のうちに放っておくなら、あなたは改心していないという証拠を与えているのである。そしてあなたが取税人や罪人だとみなす人々があなたよりも先に天の御国へ入るようになる。取税人や罪人たちと共に食べることに反対する人々は自分自身の一連の行動を厳しく批判すべきである。……

キリストに従う者は自分自身のために生きることをしない。自分自身のために生きる人はクリスチャンではない。彼はキリスト・イエスのうちに新しく創造されていないのである。罪人がキリストを十字架上看る瞬間から、すべての障壁が崩される。彼は罪の罪深い性質を見て、神に対する悔い改めと主イエス・キリストに対する信仰を働かせる。……

キリストを愛する弟子はキリストがそのために死なれた魂を愛し、またキリストに自らを余すことなく捧げるようになる。彼はキリストが働かれたように働く。彼はキリストがなされたようにするのである。彼は罪人のいるところへ行く。神との共労者になれるように自分のあらゆる力、自分の機転と能力を教育する。彼は神を知らない人々の前に十字架の秘密を掲げる。真にキリストと結合している魂はみな、人類を引き上げ、救うために神と共に働く共労者となる。この世のどんな他の存在もわたしたちの奉仕に対する要求に影を落とすことはない。わたしたちの性質のすべての部分、わたしたちの存在の一瞬一瞬は神の御子の尊い血によって買われたのである。(サイン・オブ・タイムズ 1898年6月23日)

## 安息日の主

「人の子は安息日の主である。」(ルカ 6:5)

〔イエスは〕……安息日に癒しを行うことによって、律法を犯すものだとみなされるようになることをご存じであった。このお方はパリサイ人たちが大変な憤慨をもってこのような行為をとらせ、これによって民を感化してイエスに反対させようとするに気づいておられた。このお方は彼らがこれらの憐れみのわざを用いて、自分の全生涯をユダヤ人の制限と強要に縛られてきた大衆の思いに影響を及ぼす強力な論拠にしようとする事をご存じであった。それにもかかわらず、それをわかっておられても安息日を取り囲んでいた意味のない迷信の壁を崩し、人々に愛と憐れみはどの日にも律法にかなうことを教えることをためらわれなかった。……

イエスは安息日に関するユダヤ人の誤った教えを正し、またご自分の弟子たちに、この日になす憐れみの行為は律法にかなっているという事実を印象づけたいと望まれた。なえた手を癒されたことによって、このお方はユダヤ人の習慣を破り、第四条の戒めを神が世に与えられた通りに立て直された。この行為によって、このお方は安息日を高め、それを阻害していた無意味な制限を一掃された。このお方の憐れみの行為はこの日を尊び、その一方でこのお方につぶやいた人々は、自分たちの役に立たない多くの礼典や儀式によって自分自身が安息日を汚していたのであった。

今日、神の御子が安息日を破り、同じようにするご自分の弟子たちを正当化されたと教える牧師がいる。彼らはキリストが安息日を廃されたと主張するため、表向きは違う目的のためであるが、あら捜しをするユダヤ人と同じ立場をとっているのである。

イエスはパリサイ人たちに向き直り、安息日に善を行うのと悪を行うのと、あるいは命を救うのと殺すのと、どちらが律法にかなっているかという質問をもって、彼ら自身の邪悪な目的に彼らを直面させられた。彼らはイエスを偽って告発するために機会をとらえようとつけねらっていた。彼らはこのお方の生涯を苦々しい憎しみと悪意をもって追いかけまわしていたが、その一方、このお方は命を救い、多くの人の心に幸せをもたらしておられた。彼らが実行しようと計画していたように安息日に殺す方が、このお方がなされたように苦しんでいる者を癒すよりもよいであろうか。神の聖日に心のうちに殺人を犯す方が、愛と憐れみの行為にあらわされる愛をもってすべての人を愛するよりも正しいであろうか。(同上 1876年11月30日)

神は安息日を人の祝福となるためにお与えになった。それは神の創造のみわざの記念となるべきであった。それは神の聖なる休息を人に思い出させるのであった。その理由のゆえにこのお方は、「それで主は安息日を祝福して聖とされた」(出エジプト記 20:11)。(レビエー・アソド・ヘラド 1897年8月3日)

1月31日

## このお方は身分の低い者たちのうちに住まわれた

「きつねには穴があり、空の鳥には巢がある。しかし、人の子にはまくらす所がない。」(マタイ 8:20)

救い主はご自身を喜ばせるために生きられなかった。このお方の生涯には利己心の跡はなかった。このお方ご自身が創造されたこの世において、このお方はそのどの部分もご自分の家としてわがものと主張されなかった。(ユース・インストラクター 1907年9月10日)

イエスは世の称賛や喝さいをお求めにならなかった。このお方は軍を指揮せず、地上の王国を支配されなかった。このお方は世の富んだ誉ある人々を通り過ぎられた。このお方は国家の指導者たちと交わられなかった。このお方は地上の低い人々の間に住まわれた。見たところ、このお方はほとんど友人のない、まったくただの慎ましい人であられた。こうしてこのお方は人の価値を判断する世の中の誤った標準を正そうとされた。このお方は彼らが自分の見かけで判断すべきではないことを示された。彼らの道徳的な価値は、世俗的な財産や不動産や株で決まるのではない。神が価値をお認めになるのはへりくだった悔いた心である。このお方は人を偏り見られることはない。このお方が最も称賛される特質は、純潔と愛であり、これらはただクリスチャンだけが持つものである。

イエスはご自分の弟子たちを博学な律法学者や役人や学者やパリサイ人からお選びにならなかった。このお方は彼らを通り過ぎられた。なぜなら、彼らはこの時代の多くの人々が感じているように、自分たちが完全だと感じて、自ら自分たちの学識と地位を誇っていたからである。彼らは自分たちの伝統や迷信に凝り固まっており、人の戒めを教理として教えていた。すべての心を読むことがおできになるお方は、教えをうける用意のできた貧しい漁師たちを選ばれた。このお方は彼らに多額の給与や世俗の栄誉を約束されなかった。かえって彼らのご自分の苦難にあずかる者となるべきことを告げられた。イエスはこの世において取税人や罪人たちと食し、通俗的な人々と交わられたが、それは彼らと共に低く世俗的なものになるためではなく、教えと模範によって彼らに正しい諸原則を提示し、その低い習慣や様式から彼らを引き上げるためであった。これらすべてのことにおいて、このお方はわたしたちに模範を残しておられ、わたしたちはこのお方のみ足の跡に従うべきである。

自分たちの心をイエスに開く宗教経験を持つ人々は、心に誇りを抱くことはなく、自分たちが神に対してイエスのように伝道者になるべき義務の下に感じている。彼らは失われた者を救おうと努める。(ザン・ワーク 10)

来る夜も来る夜もこのお方はご自分の群れのために祈られるのであった。神が彼らに従う力をくださるようにと。そして、それからこのお方は地面に横たわられた。なぜなら、時には、そこがこのお方のその晩休まなければならない唯一の場所だったからである。(ノース・パシフィック・ユニオン・グラナー 1910年4月6日)

## 研究 13

## 清めの特別な働き



## 4. 永遠の福音

これまで次の通り、見てきました。

聖所、罪人に示されたもの(創世記から黙示録まで)

大贖罪の日における大祭司の立場と働き(聖所の清めと民の清め レビ 16章と 23章)

清めの特別な働き、罪の除去が地上の民の間で行われなければならない(レビ記 23章、民数記 29:7-11 参照)

それでは今月から、四番目の主題について見ていきます。

## 4. このメッセージは黙示録 14 章の中でさらに明瞭に示されている

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め』。また、ほかの第二の御使が、続いてきて言った、『倒れた、大いなるバビロンは倒れた。その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者』。ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った、『おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして、獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない。ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』。」(黙示録 14:6-12)。

## 永遠の福音

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は……宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて」(黙示録 14:6)。

福音とは何でしょうか。

「神の福音……御子(わたしたちの主イエス・キリスト)に関するものである」(ローマ 1:1-3)。

「わたしは福音を恥としない。……神の義は、その福音の中に啓示され、……」(ローマ 1:16-17)。

「しかし今や、神の義 (righteousness) が、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、現された。それは、イエス・キリストを信じる信仰による神の義(righteousness) であって、すべて信じる人に与えられるものである。……すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、彼らは、働かずに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされる (justified) のである。神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義 (righteousness) を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、それは、今の時に、神の義 (righteousness) を示すためであった。こうして、神みずからが義となり (just)、さらに、イエスを信じる者を義とされる (justifier) のである」(ローマ 3:21-26)。

これらの聖句から、福音は、御子イエス・キリストの関するものであり、その中には神の義が啓示されていることがわかります。つまり、神の義は律法によってあかしされているものですが、罪人はその律法を守ることによって神の義を得ることができないため、神は、律法とは別に、ご自分の恵みによって、イエス・キリストをあがないの供え物となさいました。これはキリストの血によるあがないの供え物であり、このキリストを信じる、すなわち受け入れる(ヨハネ 1:12) ことによって、罪人は神の義を得ることができます。こうして、神は律法を擁護しつつ、合法的に罪人を義認することがおできになるのです(“He might be just, and the justifier of him which believeth in Jesus.”)。これこそ、罪からの救いを求めて叫んでいる魂にとって福音であり、はじめから伝えられた永遠の福音です。

それでは、神の義とは何でしょうか。どのようにして、受けられるものなのでしょうか。

### このお方の義

「義は愛であり、そして愛は神の光であり、命である。神の義はキリストの中に具体化した。わたしたちはキリストを受けることによって義を受けるのである」(祝福の山 22)。

「彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」(ヨハネ 1:12)。

「それは、……すべて信じる者に、救を得させる神の力である」(ローマ 1:16)。

「義は愛であり、そして愛は神の光であり、命である」。この短い文章の中にわたしたちは、人の義—正しい行いや最善—とはまったく起源を異にする神の義を見ます。人が、罪、すなわち律法の違反によって失ってしまった義は、神の義であり、人が救われるために必要としている義も、神の義、すなわち、神の愛であって、それに満たないものは認められません。この神の義は、神ご自身と同様に神聖な律法に表されており、わたしたちはその具体的な表現を、キリストの生涯の中に見ることができます。このキリストを自分の救い主として受け入れることによって、人は「神の子となる力」を受け、その人の一つ一つの言行にキリストの生涯に表されたのと同じ神の義が表れるようになります。

このことについて、みことばはさらに詳しく教えています。

## キリストの着せられる義

「キリストの義が、わたしたちの側の何かの功績のゆえではなく、神からの無償の賜物としてわたしたちに着せられるという思想は、尊い思想である。神と人の敵は、この真理がはっきりと提示されることを望んでいない。なぜなら、もし人々がそれを完全に受け入れるなら、自分の力が打ち砕かれることを知っているからである。……

信仰とは神に信頼すること—このお方がわたしたちを愛し、わたしたちにとって何が最善であるかをご存じであることを信じることである」(ビュー・アズ・ヘルド 1908年12月24日)。

「民として信仰による義認について誤った考えをいさぐという危険について、繰り返し繰り返しわたしに示されてきた。わたしは何年もサタンがこの点において人々の思いを混乱させるための特別な方法で働くことを示されてきた。……何年もわたしの思いに迫ってきた点というのは、キリストの着せられた義である。

墮落した人間が自分自身の最善の行いによって何らかの功績をもたらすことはまったく不可能であるということほど、もっと真剣に熟考し、もっと頻繁に繰り返され、もっと堅固に確立される必要のある点は何にもない。救いはただイエス・キリストを信じる信仰を通してのみである」(E.N.G. 初刊 1888年 771-772, 810, 811)。

「あなたが自分自身の有限な力のうちになすことのできる決意は砂の繩にすぎない。しかし、もしあなたが自分自身、すなわち魂、体、霊を神に明け渡して、まごころから祈るなら、あなたは神の武具を全身にまとい、魂をキリストの義に対して開くのである。そしてこれだけが、すなわちキリストの着せられる義だけが、あなたを悪魔の策略に対して立たしめるのである」(神のむすこ娘たち 346)。

「生も死も、高いものも深いものも、キリスト・イエスにおける神の愛からわれわれを引き離すことはできない。それはわれわれがしっかりとキリストをつかんでいるからではなく、キリストがわれわれをしっかりとつかんでいるからである。もし救いがわれわれ自身の努力にかかっているとすれば、われわれは救われることができない。しかし救いは、すべての約束を支持しておられる方にかかっているのである。……」(患難から栄光へ下巻 256)。

神ご自身がすべてのあわれみの源である。神のみ名は「あわれみあり、恵みあり」である(出エジプト記 34:6)。神はわたしたちの功績にしたがってわたしたちを取り扱われるのではない。神はわたしたちが神の愛を受ける価値があるかどうかは尋ねられない。かえって神はわたしたちを価値ある者とするために、その豊かな愛をそそがれるのである。神

は懲罰的ではない。神は罰することを求めず、かえって救うことを願われる。摂理によって示されるきびしい処置でも、さ迷う者の救いのために示されるのである。主は人の苦痛を和らげ、その傷に主の香油をぬろうと熱望しておられる。神が『罰すべき者をば決してゆるさ』れないことは本当である(出エジプト記 34:7)。しかし神は罪を取り去ろうと願っておられるのである(祝福の山 27)。

神はご自分の義をわたしたちに与えたいと切望しておられます。わたしたちがそれを求める前に、神はご自分の恵みによって、御子をさえ与えてくださったのです。キリストの「血による、信仰をもって受くべき供え物」を見て、「恵みをむだに」しないと云ったパウロは、「墮落した人間が自分自身の最善の行いによって何らかの功績をもたらすことはまったく不可能であり、「救いはただイエス・キリストを信じる信仰を通してのみである」ことをはっきり理解しました。そして、恵みをむだにせず、「信仰によって」この義を受けたパウロは、次のようにあかししました。「信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法は確立するのである」(ローマ 3:31)。「キリストの義が、わたしたちの側の何かの功績のゆえではなく、神からの無償の賜物としてわたしたちに着せられるという思想は、尊い思想である。」

この永遠の福音をたずさえてきた第一の御使は、「神をおそれ」よ、とのメッセージを大声で伝えています。これは何を意味するでしょうか。

## 神をおそれ

「愛する者たちよ。わたしたちは、このような約束を与えられているのだから、肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くなろうではないか」(コリント第二 7:1)。

「いづくしみとまことによって、とがはあがなわれる、主を恐れることによって、人は悪を免れる」(箴言 16:6)。

「わたしは彼らと永遠の契約を立てて、彼らを見捨てずに恵みを施すことを誓い、またわたしを恐れる恐れを彼らの心に置いて、わたしを離れることのないようにしよう」(エレミヤ 32:40)。

「主を恐れることは命の泉である、人を死のわなからのがれさせる。……」(箴言 14:27)。

清めの特別な働きは、「神をおそれる」ことから始まることがわかります。

(46 ページの続き)

ならないのでしょうか?小麦やトウモロコシはその成長をやめ、木や花は安息日につぼみや花を咲かせることもしてはならないのでしょうか?

そうなれば、人は地の果実、また自分たちの命を支える祝福を失うこととなります。自然はその働きを続けなければ、人は死んでしまうことでしょう。そして、人にもこの日になすべき働きがあります。生活上の必要に備え、病人を世話し、困っている人々の欠乏を満たさねばなりません。神さまはご自分の被造物が安息日でもほかの日でも、苦しみを和らげられるものなら一時間でも苦しむことをお望みになりません。

天の働きは決してやむ時がありません。人間もよいことをするのを休んではなりません。わたしたち自身の働きを、主の休みの日になすことを律法は禁じています。生計のための骨折りはやめなければなりません。世俗的な楽しみや利益のための労働をこの日にすることは律法にかなっていません。しかし、安息日は何もせずむだに過ごしてはなりません。神さまがご自分の創造の働きをおやめになって、安息日に休まれたように、わたしたちも休むのです。神さまはわたしたちが日常の仕事をわきに置いて、この神聖な時間を健康的な休息や、礼拝、そして聖なる行為にささげるよう、命じておられます。

## セリと大根のサラダ

### ■材料

セリ	1束
大根	1/2本
にんにく	1片
長ねぎ(白い部分)	5cm
塩	大さじ1
レモン	大さじ2
砂糖	適量(大根がおいしければ、なくてもOK)
昆布だし(顆粒)	少々
炒りごま	適量
タカの爪	小さじ1
刻みのり	お好み

### ■作り方

大根を厚めの千切りにします。

せりを大根の長さにあわせて、切ります。

にんにくを包丁でつぶしてから、荒く切って大根に加えます。

長ねぎを細かく切って大根に加え、それに塩を入れ、料理用の手袋をはめてよくなじむまで、もみながら混ぜます。

セリと残りの調味料をすべて入れて、全体に味がなじむまで混ぜます。

のりは、食べる直前にかけてもよいです。

冬のさっぱりサラダにどうぞ。

## 教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校：9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教：11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究：14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



## 聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先：〒350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱13号「福音の宝」係

是非お申し込み下さい。

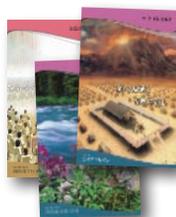


## 書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



## イエスの物語

## 第23話 安息日の遵守(IV)

遵守=守り、従うこと

そのとき救い主がおられたエルサレムには、学者のラビが多く住んでいました。ここで彼らの安息日についての誤った考えを人々は教えられていました。大ぜいの人々が宮で礼拝をするために来たので、ラビの教えは遠くいたるところに広がりました。キリストはこれらの誤りを正したいと望まれました。これこそ、このお方が安息日にこの人を癒され、彼の床を運ぶようにとお語りになった理由でした。このお方はこの行動がラビたちの注目を引くことをご存じでした。こうしてそれがこのお方にとって彼らを教える良い機会となるのでした。はたして、その通りでした。パリサイ人たちは、安息日を犯したという告発に答えさせるため、キリストをサンヒドリン、すなわちユダヤ人の最高議会の前に引き出しました。

救い主はご自分の行為は安息日の律法に調和していると宣言されました。これは神さまのご意志とお働きに調和していました。「わたしの父は今に至るまで

働いておられる。わたしも働くのである」とこのお方は仰せになりました(ヨハネ 5:17)。

神さまは、すべての生き物を支えるために絶えず働いておられます。ご自分の働きは安息日にやめなければならないのでしょうか？神さまは太陽に安息日にその働きを果たすことを禁じなければならないのでしょうか？このお方はその光線が地をあたため、植物を繁茂させるのをたち切らなければならないのでしょうか？

小川は土地を潤すのをやめ、海の波は満ち引きをやめなければ

